
キューピッド・ゴブリン

チェリ→

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キューピッド・ゴブリン

【Nコード】

N0749G

【作者名】

チエリ↓

【あらすじ】

慧は友達と一緒に始めたオンラインゲームの中でゴブリンに襲われた時に助けてくれた女の子に恋をする。しかし、同じクラスの成瀬沙耶の事も気になり始め――。

- P r o l o g u e -

「Guild」 Reia << そろそろおちまーす。おやすみなさーい（、）ノシ

「Guild」 Aya << おやすみーw

「Guild」 Ryuka << おやすみん

「Guild」 Bunbun << ばいばーい（、）ノシ

「Guild」 Sho << またねー^^

「Guild」 Mars << おやすみ

夜11時半――。

ゲームのプログラムを終わらせて、パソコンの電源を切った。

私・^{なるせ}成瀬^{さや}沙耶は、いつもこの時間までゲームをしている。

高校に入ってから始めたオンラインゲームで、

3ヶ月近く経った今ではギルドの仲間ともすっかり打ち解けて仲良くなった。

元々、私は人見知りをする方で人と話するのが苦手だ。

だけど、ゲームの中ならわりとすんなり話ができる。

本物の相手が目の前にいるワケじゃないから。

そして、相手の目の前にいるのも本物の私じゃないから――。

「おいっす。」

「おいっすー。」

「あー、俺今日、日直かあー、だりいー。」

教室に入った途端、怠そうに言いながら

俺・たけのうち竹之内なぐさ慧の前に座っている

大山はげんなりした顔をした。

こいつとは特に親友というワケでもないが、

席が目の前ということもあり、仲は良い方だ。

「あ、でも女子が成瀬さんだから楽だな。」

「お前また日直、女子に押し付けてサボるつもりかよ。」

こいつは悪い奴ではないけれど、日直とか掃除当番とか
そついうのをよくサボる癖がある。

「だって、成瀬さん大人しいからサボっても他の女子みたいに
文句言わないからな。」

大山はにやりと笑った。

ちなみに成瀬さんとは、成瀬沙耶ちゃん。

背が低くて髪が肩を過ぎた辺りまである同じクラスの

大人しい女の子だ。

だいたいいつも女の子としゃべってて、あまり男子とは
しゃべらない。

しかも人見知りするタイプなのか、席が近い男子とか

日直と一緒にあった事がある男子くらいしか

しゃべった事がないらしく、俺も大山もともに会話した事がない。

女子と話している時も全然きゃぴきゃぴしてないっていうか、
騒がしいと思ったことがない。

そんな子だから日直とか掃除当番が一緒になった男子がサボってても
文句も言わない。

いや、言わないんじゃないかって言えないのかな？

「そんな事より、慧。」

「あ？」

「おもしろそうなオンラインゲーム見つけたんだけど、
一緒にやってみねえ？」

「オンラインゲーム？」

「うん、基本無料のヤツでさ。昨日、偶然みつけた。」

「へえー、まあ、いいけど?」

「んじゃ、帰ったらメールでその公式サイトのアドレス送っとくわ。」

大山はそう言ういつものように学食で買ってきたコーヒー牛乳を飲み始めた。

1時限目が終わり、さっそく日直の仕事。

次の授業が始まるまでに黒板をきれいに消しておく事だ。

先生が教室から出て行った後、成瀬さんが黒板を消し始めた。

だけど彼女は背が低いから上の方を消すのに苦労している。

「おい、大山。お前日直じゃねえの？」

俺は目の前の席で携帯を弄っている大山に声を掛けた。

「んあ？いいよ、成瀬さんがやってるし。」

大山は携帯から目を離す事無く答えた。

俺の方も黒板の方も見ないで答えたって事は

完璧に成瀬さんが全部やってくれると思っているらしい。

全然やる気ねえな・・・。

成瀬さんの方を見ると思いっきり背伸びをして、

手も目一杯伸ばしてまだ黒板と格闘している。

だけどあと少しの所でどうしても一番上に書いてある文字が消せない。

すると、それを見かねた成瀬さんとも仲の良い杉田さんが助けた。

そして、何か言いたそうな顔で大山を睨みつけている。

大山・・・お前、睨まれてるぞっ？

しかし、大山は杉田さんの視線にも俺の視線にもまったく気付く事無く携帯を弄っている。

こいつは背も高いし、顔も悪くないのにいまいち女の子にモテないのは

こーゆーところがあるからなんだろうな・・・。

放課後――。

HRが終わって俺が他のクラスの友達の所へ行って話をした後、教室に戻ると成瀬さんが日直日誌を書いていた。

そして机の上には山のようにノートが積まれていた。

あー、そういえば6時限目の化学の授業のノートを提出しなきゃいけないんだっとな。

こういうノートの提出がある時、先生の所に行って行くのも

日直の仕事だ。

だけど、教室の中を見回しても大山の姿がない。

「大山は？」

日直日誌を書いている成瀬さんに声を掛けると

俺の声に少しだけビクッとして顔をあげた。

「大山くんなら、もう帰ったよ。」

成瀬さんは俺の顔を見るなり、すぐに俯いて小さな声で言った。

「え？あいつ、今日日直だろ？」

成瀬さんが日直日誌を書いているなら、普通はその間に

先生の所に提出するノートを持って行くはずだ。

別に誰が決めた訳でもないけれど、俺達のクラスの中では

それが暗黙の了解みたいになっていた。

あいつ・・・日誌もノート提出も成瀬さん一人に押し付けて帰ったのか？

成瀬さんは日誌を書き終わると黒板に近づき、

日直の欄に書かれた自分の名前を消し、

翌日の日直の名前を書いた。

日直は基本的に男子と女子の出席番号順で一日の終わりに

次の日直の名前を書いて帰る。

女子は次の女子の名前を、男子は次の男子の名前を。

で、書き忘れたら次の日もう一度日直をするハメになる。

成瀬さんは女子の名前を書き終わると、大山の名前を消して次の日直・加瀬の名前を書いた。

「なんで成瀬さん、大山の仕事までやってんの？」

男子の次の日直の名前を書いて帰るのは大山の仕事だろ？」

「そうだけど・・・大山くん、もう帰っちゃったし。」

「そんなの関係ないだろ？」

「でもー・・・」

「とにかく、男子の日直は最後に次の男子の名前を書いて

それで日直の仕事が終わるんだから、成瀬さんがそこまでする事
ないよ。」

俺はそう言って加瀬の名前を消し、もう一度大山の名前を書いた。

「次の日直の名前を書いて帰らなかったんだから、

大山が明日、もう一回日直をすべき。」

俺がそう言つと成瀬さんは俯いたまま「・・・う、うん・・・。」
と、

小さな声で頷いた。

「それより、化学のノート、先生の所に持って行くんだろ?」

「うん。」

「俺も手伝つよ。」

「えっ!？」

成瀬さんは驚いた顔で俺の顔を見上げた。

ノートはクラス全員分だから50冊ちよつとある。

重さはともかく高さだつてあるから運ぶのはちよつと大変だ。

これを全部女の子一人に押し付けて帰るなんて

大山は相当な鬼だ・・・。

「い、いいよ。竹之内くん曰直じゃないんだし。」

「何言つてんだよ、成瀬さん一人じゃ全部持てないだろ?」

「だ、大丈夫・・・と、思う・・・。」

絶対、嘘だ・・・。

半分ずつに分けて往復してでも一人で運ぶつもりだ。

「ムリだよ。．．．いいから、一緒に行こう。」

俺は成瀬さんの机の上にあるノートを10冊程彼女に持たせ、残りの40冊ちょっとを持ち上げた。

「．．．。」

成瀬さんは何か言いたそうな顔で俺を見た。

だけど俺は彼女の口が開く前に化学実験室に向かって歩き始めた。
すると、成瀬さんも俺の後を追いかけるようについて来た。

「竹之内くん．．．ありがとう。」

化学実験室にノートを置いて出ようとする

成瀬さんが思い切ったように口を開いた。

「うん。」

俺は短く返事をした。

成瀬さんと、まとも(?)に会話したのはこの日が初めてだった。

学校から帰ってパソコンを立ち上げてメールをチェックすると、

大山からメールが来ていた。

メールの内容は今朝アイツが言っていたオンラインゲームの

公式サイトのアドレスだった。

早っ！

まったく、こいつは・・・日直はサボるクセにこーゆー遊びの事となると

マメだな・・・。

そんな事を思いながらとりあえずメールに書いてある通り、

公式サイトにアクセスしてゲームのクライアントをダウンロードした。

ダウンロードとインストールをしている間に夕飯を済ませ、

風呂から上がった後、ゲームを起動すると

大山から携帯に電話がかかってきた。

「おいつすー。」

『おいつす。メール見た?』

「おう、見た見た。今、インストールも終わってキャラ作ってるトコ。」

『お、ちょうどよかった。お前どんなキャラにする?』

「んー、俺はとりあえず戦士にしようかと・・・。」

『あー、じゃ、かぶらなくて済んだな。』

「お前、何にするんだ？」

『俺は盗賊にしようかと。』

「へえー。」

『名前は何にする？』

「んー、考え中。」

『俺は“Hyde”にした。』

「ほー、まあ、何が元ネタがすぐわかるけど。」

多分、コイツの好きなバンドのヴォーカルの名前。

『ははは、やっぱり?』

「うん、わかり易過ぎー。」

『まあ、お前も決まったら早く入って来いよ。待ってるから。』

「ああ、わかった。ゲームに入ったら知らせるよ。」

とりあえず電話を切り、再び名前を考える事にした。

さて・・・どんな名前にしよう?

俺は大山みたいにキャラ名にしたい程、

ものすごく好きなバンドがいるワケでもない。

まあ、テキトーでいいか・・・。

とりあえず、キャラ名を入力して種族や職業、フェイスタイプ、髪型や髪色なんかを選んでゲームに入った。

サーバーと最初に始める町は大山からのメールですでに決めてあった。

ゲームに入ると目の前に“Hyde”というキャラがいた。

大山だ。

俺はさっそくHydeに向かってエモーションで手を振り、チャットの耳打ちで話しかけた。

「耳打ち」 Orli << おいつすー、お待たせ

「耳打ち」 Hyde << おー、来たか。つーか、その名前ど
っから取ったんだ？

「耳打ち」 Orli << 最近カッコいいなと思ってる俳優の
愛称にしてみた

「耳打ち」 Hyde << へー

「耳打ち」 Orli << ところで最初何からやる？

「耳打ち」 Hyde << んー、とりあえずパーティ組んで町
の中を探索してみようぜ

「耳打ち」 Orli << ok

俺と大山はパーティを組んでまずは町の中をいろいろ回ってみるこ
とにした。

NPCに話しかけてクエストを受け、それをクリアすると報酬で武
器や防具が貰えたり、

お金が貰えたり、経験値が入ったりする。

「Party」 Hyde << そろそろ外に行ってみる？

「Party」 Orli << そうだな、行ってみるか

そしていくつかクエストをクリアした頃、町の外に出て

モンスターと戦闘を試みる事にした。

「Party」 Hyde << ヒーラーいないけど平気だよな？

「Party」 Orli << そんなに無茶なレベルの敵に突っ込んでいかなきゃ大丈夫だろ

「Party」 Hyde << おっし！ んじゃ、まずはその辺のからぶつ叩いてみつか

「Party」 Orli << ok

俺と大山は町から出たところにいる一番レベルの低いモンスターに殴りかかった。

すると、二人掛けりの戦闘はさすがにあっという間に終わった。

「Party」 Hyde << あ、弱え

「Party」 Orli << 元々ソロで倒すのに丁度いい敵だしな！

「Party」 Hyde << もっと強い敵いねえかな？

「Party」 Orli << ソロパーティーやるか？

「Party」 Hyde << それだと経験値はどうなるのかな？

「Party」 Orli << さっきwikiでちらっと見たけどお互い離れたトコで狩ってれば問題ないっぽい

「Party」 Hyde << ふーん まあ、やってみるか

俺と大山はお互い少し離れた所でそれぞれモンスターを狩り始めた。

そして、HPが減ってきたら座ってヒーリング・・・回復したらまた狩り始める。

それを繰り返してレベルも順調に上がっていった。

お互いのレベルも7になり、町からもかなり離れた所まで来た。

「Party」 Hyde << あそこにいるゴブリン強そう

「Party」 Orli << 赤い名前のかー

このゲームの中のモンスターは自分のレベルに丁度いいモンスターは黄色、

ちょっと強そうなのはオレンジ、かなり強そうなのは赤で表示されている。

「Party」 Hyde << 無理かな？

「Party」 Orli << んー どうだろ？

そんな会話をしながら俺達が迷っていると背後から別のゴブリンに見つかった。

「Party」 Hyde << げ からまれた

「Party」 Orli << しゃーない やるか

俺と大山は抜刀し、殴りかかってきたゴブリンに切りかかった。

「Party」 Orli << つか、コイツも赤ネームだ

「Party」 Hyde << さすがに強いなー

俺と大山の二人掛かりでもなかなかHPが減っていない。

というより、むしろこっちのHPの方が削られまくっている。

「Party」 Hyde << ヤバくね？

「Party」 Orli << 非常に

そして、俺も大山も後2、3発喰らうと全滅・・・というその時、

俺のHPが全快し、次に大山のHPも全快した。

「Party」 Hyde << あれ？

「Party」 Orli << お？

俺達が不思議に思っていると今度は防御力アップと攻撃力アップの魔法がかけられた。

「Party」 Hyde << おお？

「Party」 Orli << 助かった

俺は画面を左右にスクロールして周りを見回した。

すると、俺達の少し離れた所に魔道士の格好をした女の子のキャラがいた。

長いストレートの銀髪の可愛らしいフェイスタイプの子で

見るからにレベルが高そうな武器を持ち、ローブを着ていた。

その子はエモーションで俺達を応援しながら無事にゴブリンを倒したのを見届けると

再び俺と大山のHPを全快まで回復してくれた。

Hyde << ありがとう

Orli << ありがとう

Reia << いえいえ(´、`)

そして、彼女はエモーションで俺達に手を振ると白馬に乗ってあっという間に見えなくなって行った。

「Party」 Hyde << すげー 馬に乗れるって事はレベル50以上で事かー

「Party」 Orli << ほー どうりで装備も高そうだったわけだ

「Party」 Hyde << つーか、せっかくだからこのまま町まで狩りながら帰ろうぜ

「Party」 Orli << そうだな 町に帰ったら装備も揃えたいし

俺達は彼女がかけてくれた魔法が解けないうちに再び狩りを始めた。

「えーっ！？なんでまた俺が日直なんだよー？」

翌朝、俺が教室に入ると大山の不機嫌そうな声が聞こえた。

「おいつす、朝から何揉めてんだ？」

なんとなくわかっていたけど一応、大山に聞いてみた。

「昨日、成瀬さんが日直の名前、俺の書き換えてくれなかったから

今日もう一日やるハメになったっぽい。」

大山はそう言つと成瀬さんを軽く睨んだ。

やっぱ、それか。

「なんでって、自分が最後に書き換えて帰らなかったからじゃん。」

ムツとした口調でそう言ったのは大山に責められ、

俯いている成瀬さんの代わりに口を開いた徳永さんだった。

「日直の最後の仕事は次の日の日直の名前を女子は女子、

男子は男子でそれぞれで書いて帰る事でしょう？」

「けど、成瀬さんはいつも男子の方も書き換えてたじゃん。

なんで俺の時だけ・・・」

「成瀬さんはちゃんと書き換えようとしてたぞ。」

大山は言葉を遮るように言った俺の顔を少し驚いた表情で振り返った。

「成瀬さんが書き換えようとしてたのを止めたのは俺だよ。」

「はあっ？なんで？」

「お前さ・・・昨日、全然日直の仕事してないだろ？」

放課後だって成瀬さん一人に日直日誌と化学の

ノート提出押し付けて帰ってたし。」

「・・・。」

「それでも成瀬さんはお前の名前を消して加瀬の名前を書こうとしてたんだよ。」

「つか、おまえも日直がそんなにイヤなら、名前くらい自分できっちり

書き換えて帰れよ。」

「わかったよ・・・。」

大山はそう言うのとムッとしたまま席に戻った。

まったく・・・こいつは・・・。

「あ、の・・・竹之内くん、ありがと・・・。」

俺も席に座ろうと一歩足を前に出した時、成瀬さんが少し上目遣いで言っただ。

「うん・・・てか、成瀬さんも自分が悪くない時はちゃんと言い返しなよ？」

「・・・。」

俺がそう言っても成瀬さんはまた俯くだけだった。

それから、大山は昼休憩になって成瀬さんに謝っていた。

しかもコーヒー牛乳まで献上して。

こいつもこいつなりに悪いと思っただらしい。

すぐにキレたり、面倒臭がったりするから誤解もされやすいけれど
自分が悪いと思った時はちゃんと謝る。

まあ、そんなヤツだから俺も“友達”をやっているワケだけど。

そして午前中は俺に対しても不貞腐れて口を聞こうとしなかったけど、

成瀬さんにも謝ってすっきりしたのか普通に俺に話しかけてきた。

「なあ、今日もやるだろ？」

「うん。けど、ちょっといろいろ調べてからログインするから

昨日と同じくらいの時間になるかな。」

「じゃあ、俺は先に入ってるから適当に狩りながら待ってるよ。」

「了解。」

明日から夏休み。

だから、いろいろネットで調べて例のオンラインゲームをやり込むつもりでいる。

——午後9時。

ゲームにログインすると大山はすでに狩りを始めていた。

「耳打ち」 O r l i < < 今、どこー？

「耳打ち」 H y d e < < お、やっと来た 今、ベナ平原

『ベナ平原』とは、俺達がゲームを始めた町を出たエリアの

さらに次のエリアだ。

「耳打ち」 O r l i < < もうそんなトコ行つてんのか？

「耳打ち」 H y d e < < てか、ここの敵めっちゃおいしいぞ

「耳打ち」 O r l i < < へー んじゃ、俺もすぐ行く

「耳打ち」 H y d e < < おう

『ベナ平原』に入るとすぐに大山を見つけることができた。

昨日よりもちよつと強そうな装備で狩りをしていた。

そして、俺達は昨日と同じ様にパーティを組んでそれぞれ狩りを始めた。

一緒に狩りを始めて2時間――。

「Party」 Orli << 結構レベルも上がったし、そろそろ町に戻ろうぜ

「Party」 Hyde << うん、そうだな。

俺と大山は昨日よりさらにレベルが上がり、戦利品でアイテム欄がいっぱいになり、

そして装備品を揃える為に町に戻った。

「Party」 Orli << レベルが10になったから 次のクエスト受けられるかも

「Party」 Hyde << つか、ミッションもできるんじゃない？

「Party」 Orli << ああ、そうだな

大山もある程度ネットで調べていたのか、

クエストの概要もミッションの概要も把握していた。

ホント・・・こーゆーコトにはマメだな。

クエストとミッションをクリアすると、報酬でお金と経験値が入った。

特にミッションの報酬は結構な経験値で俺も大山も一つレベルが上がった。

「Party」 Hyde << おお、レベルあがった

「Party」 Orli << 俺もあがったー

「Party」 Hyde << クエストで貰った金と戦利品売ったら新しい装備買えるかも

「Party」 Orli << だな。

「Party」 Hyde << そういえば攻略サイトに売れ筋のアイテム載ってたな 見た？

「Party」 Orli << 見た見たー

「Party」 Hyde << オークション行ってちょっと相場見てみようぜ

「Party」 Orli << らじや

俺と大山は町の中にあるオークションに移動した。

このゲームはモンスターから得た戦利品をオークションに出品して売ったり、他のプレイヤーが出品したアイテムを買ったり出来る。

もちろん、プレイヤーがバザーという形で直接販売する事も可能だ。

オークションを見ているいろいろアイテムを出品すると、

すでに日付が変わっていた。

「Party」 Hyde << げ。もうこんな時間だ

「Party」 Orli << 早いなー

「Party」 Hyde << やべえー もう落ちないと

「Party」 Orli << 俺はもう少しやろうかな いろんな人のバザーとかも見てみたいし

「Party」 Hyde << お前のトコ こんな時間まで起きてて何も言われないのか？

「Party」 Orli << んー まあ俺ン家は共働きで忙しいし 放置されてっから

「Party」 Hyde << いいなー

「Party」 Orli << そうかー？

「Party」 Hyde << 俺ん家なんていつも口うるさいし 夏休みだつてのに

夜更かしもさせてくれない

「Party」 Orli << ははは けどまあ、放置されまくりもどうかと思うぞ？

「Party」 Hyde << 俺はそっちの方がいいけどなー て、マジでもう寝るわ

「Party」 Orli << おう

「Party」 Hyde << あ、そうだ 明日は多分、俺昼

からやってると思うから

「Party」 Orli << 俺も多分昼ぐらいからやる

「Party」 Hyde << そつか んじゃ、また明日ー
おやすみー

「Party」 Orli << おやすみー

大山が落ちた後、俺はオークションの前にいる人達のバザーを覗きに行った。

すると昨日、俺達を助けてくれたあの魔道士の女の子がいた。

あ・・・あの子だ。

俺はパソコンの画面の前で話しかけてみようか、

どうしようか迷った。

だけど・・・

迷っているうちに彼女はどこかへと行ってしまった。

あゝあ・・・、結局話しかけられなかった・・・。

てか、あの子も結構遅い時間までやってるんだな。

高校生ならいくら夏休みに入るからと言っても

だいたいこんな時間までゲームをやってて親がうるさくないワケがない。

一人暮らしの大学生か社会人なのかもしれない。

まあ、俺のトコみたいに放置されてるって可能性もあるけど。

――8月。

俺と大山は連日昼過ぎから夜遅くまで、それこそメシと風呂以外の時間、

睡眠時間もそこそこにずっとゲームをやっていた。

おかげで二人ともレベルも順調にあがり、25になった。

そして、いつものように先にゲームにログインした俺は

一人で狩りをしながら大山が来るのを待っていた。

しかし、今日はやけに遅い……。

いつもなら遅くても午後2時過ぎには来るのに。

時間はすでに午後3時を過ぎていた。

まあ、何か調べてから来るのかもしれない。

そう思って深く考えずにいた。

午後7時。

結局、大山はこの時間まで入って来なかった。

俺は晩メシと風呂に入る為、一旦ゲームからログアウトした。

午後10時前。

さすがにそろそろ大山も来てるかな？と思いながら

ゲームにログインした。

しかし、大山はまだ来ていなかった。

俺は仕方なく夏休みの宿題をしながら待つことにした。

まったりだけど一人でずっと狩りをしていたから

レベルがあがってしまっていた。

別に大山から待っててくれと言われたワケじゃないけど

アイツと一緒に始めたゲームだし、あんまり差がついたら

アイツがおもしろくなるだろうと思ったからだ。

それに、夜になって少しだけ涼しくなったおかげで

宿題も捗りそうだった。

そして、待つこと2時間余り。

すでに日付も変わってしまった。

この時間からアイツが来る事は有り得ないだろう。

すっかり宿題も片付いてしまった。

大山も宿題を片付けていたのかもしれないな。

——翌日。

今日は登校日。

生の大山と会うのは久々だ。

夏休みに入ってからゲームの中では会っていたものの

話すのもチャットばかりだったし。

教室に入るとすでに大山は来ていた。

「おいっすー。」

まだ眠いのか机に顔を伏せたまま動かない大山の背中を
ツンツンしてみた。

すると、大山はゆっくりとした動きで顔をあげ、
俺の方を振り返った。

「おう……。」

「なんだ、まだ寝ぼけてんのか？」

「そうじゃねえよ……。」

「どうしたんだ？ コーヒー牛乳も飲んでないじゃん。
体調でも悪いのか？」

コイツは毎朝、学食でコーヒー牛乳を買ってきて飲んでいる。
体調が悪い日以外は。

「至って健康……。」

「んじゃ、サイフ忘れたとか？」

「違う……。」

「もしかしてコーヒー牛乳が売り切れだったとか？」

「違う……。つか、今日は学食すら行ってねえし。」

「じゃ、なんだよ？」

コイツが学食にも寄らず真っ直ぐ教室に来たという事は

体調不良以外考えられないけど、本人は健康だって言ってるし、

さっぱり見当がつかない。

「消された……。」

「あ？」

「キャラクター……。」

「へ？」

キャラクターって、まさか……

「あのゲームのキャラ……。」

「えっ!？」

まぢか？

「なんでまた？」

「連日連夜、宿題もせずにやってたら

とうとう親の雷が落ちてさー。」

「あらら・・・。」

「つか、コイツ宿題もせずにやってたのかよ。

「それで昨日、入ってこなかったんだ？」

「ああ・・・。」

「その様子じゃ復活は無理そうだな？」

「復活どころか、ノートパソコンまで取り上げられた・・・。」

「あちゃーっ。」

こりゃ、相当な雷が落ちたと見た。

「つーワケで、俺はもうあのゲームできねえし、

もし、ノーパソ返してもらったとしても

またハマッて取り上げられそうだからやめるよ。」

「そっか・・・。」

こっいつ時、親に放置されててつくづくよかったと思う・・・。

新学期が始まって数日が過ぎた頃――。

[Guild] Reia < < こんばんはー(、(ノ

[Guild] Ryuka < < こん^^

[Guild] Bunbun < < こんばんは(、(ノ

[Guild] Aya < < やほーw

[Guild] Sho < < おいつすー

[Guild] Mars < < こんばんは

[Guild] Orli < < こんばんは

――夜8時過ぎ。

いつものようにゲームにログインすると、

いつものギルドメンバーの他に一人だけ知らない人がいた。

「Guild」 Sho << レイア、新しく入ったオーリーだよ

「Guild」 Orli << オーリーです。よろしくお願いします。

「Guild」 Reia << レイアです。よろしくね（、）

新しくギルドメンバーになった人啊ー！。

「Guild」 Orli << レイアさんのキャラって、長い髪のストレートで銀髪ですよね？

「Guild」 Reia << うん（、、）

「Guild」 Orli << じゃあやっぱ、そうだ^^

「Guild」 Reia << ？

「Guild」 Orli << 前に俺がゴブリンと戦ってて死に掛けてたのを

助けてくれた人ですよね？

「Guild」 Reia << 憶えてないかも（、、..）（..）

めんなさい

「Guild」 Sho << レイアはあっちこっちで救援してるからー

シヨウさんの言うとおり、私は死にそうな人を見かけるとよく回復したり、支援魔法をかけたりしている。

「Guild」 Sho << んじゃ、レイアも来た事だし、顔合わせも兼ねて

みんなで釣りにでも行くか？

「Guild」 Bunbun << 賛成（´、`）ノ

「Guild」 Reia << 賛成（´、`）ノ

「Guild」 Mars << いいねー

「Guild」 Ryuka << 行こう行こう^^

「Guild」 Orli << ^^

「Guild」 Aya << どれいくー？

「Guild」 Sh o < < そうだなー オーリー、今レベルいくつ？

「Guild」 O r l i < < 3 3

「Guild」 S h o < < じゃ、白珊瑚海岸行こう^^

という訳で、さっそくオーリーさんの顔合わせも兼ねて

みんなで『白珊瑚海岸』へ釣りに行く事になった。

集合場所はオーリーさんが今いる町の噴水の前。

私もちょうど同じ町にいる。

みんなよりも一足先に噴水に行くとオーリーさんがいた。

私のキャラの髪色よりも少し青みがかったブルーシルバーの髪で

ショートカット。

フェイスタイプは少し切れ長の目できりりとしているキャラだった。

私がエモーションで手を振るとオーリーさんもエモーションでぺこりとおじきをした。

「Guild」 Reia << オーリーさん、ジヨブは何？

「Guild」 Orli << 戦士 レイアさんは？

「Guild」 Reia << レイアでいいよ、、、私
は魔道士

「Guild」 Orli << じゃ、俺の事も呼び捨てで^^

「Guild」 Reia << りょーかい、、、

「Guild」 Orli << レベル高そうだけどいくつ？

「Guild」 Reia << この間やつと80になったとこ
ろ、、、

「Guild」 Orli << すげーっ

「Guild」 Reia << 私なんかまだまだだよ ギルド
の人達は

100以上の人もあるし

「Guild」 Orli << おおっ

と、そんな話をしているとギルドマスターのシヨウさんが来た。

「Guild」 Sho << オーリー 釣竿は何持ってる？

「Guild」 Orli << 木製釣竿

「Guild」 Sho << 強化してある？

「Guild」 Orli << ううん モンスターがドロップしたのを

そのまま使ってる

「Guild」 Sho << じゃあ こっちの竹製釣竿あげる

木製のより折れにくいから大物がかかっても釣り上げられるよ

「Guild」 Orli << わ +10まで強化もしてある。
ありがとー^^

「Guild」 Sho << いえいえん^^

シヨウさんは基本的に面倒見が良い。

私も最初の頃、こんな風によくアイテムを貰っていた。

そして間もなくして、ギルドメンバーが揃い、

『白珊瑚海岸』へと出発した。

『白珊瑚海岸』はその名の通り、白い砂浜と白珊瑚の欠片で埋め尽くされている。

私も気に入っていてよく釣りをしに来る場所だ。

「Guild」 Orli << すげー きれいなとこだなー

オーリーは目の前に現れた真っ白い世界に感動したみたいだった。

しかし、その後すぐに、

「Guild」 Orli << うおっ モンスターの名前が全部赤い；

と、エモーションでわたわたと慌てた。

このモンスターはソロだとレベル45くらいからが丁度良い。

オーリーは完璧からまれるレベルだ。

「Guild」 Sho << 大丈夫、大丈夫^^ 俺等がいるから

「Guild」 Ryuka << からまれてもみんなでぶつ叩く^^

「Guild」 Aya << 最悪死んでもレイアが生き返らせてくれるよw

「Guild」 Orli << 死・・・;

「Guild」 Bunnun << けど、ここで釣れる魚はわりと高く売れるよ(´、`)

「Guild」 Orli << へー

「Guild」 Reia << 合成の調理にも使えるし(´、`)

「Guild」 Mars << 白珊瑚の欠片とかアコヤ貝なんかもたまに釣れるし、

それも結構高値で売れるよ。合成にも使えるし。

「Guild」 Sho < < そそ、だからちょっとオーリーは
モンスターに

からまれるかもだけど その分おいしいから^^

「Guild」 Orli < < ^^

そうして私達はみんな一列に横並びになって釣りを始めた。

——ブチッ……。

「Guild」 Orli << あ

釣りを始めて30分。

調子良く魚を釣り上げていた俺の釣竿の糸が切れた。

「Guild」 Reia << い、今の音は……（、；

「Guild」 Sho << 釣り針持つて行かれたっぽいね；

「Guild」 Bunbun << あちや><

「Guild」 Aya << 予備持つてきてる？

「Guild」 Orli << いや 一個しか持つてなかったから

「Guild」 Reia << じゃあ 作ってあげる（、、（

レイアはそう言っと釣り針をその場で合成してくれた。

「Guild」 Orli << ありがとう^^

「Guild」 Reia << 失くしたらまた作ってあげるね
(、)

「Guild」 Orli << 材料持ち歩いてるの？

「Guild」 Reia << うん 釣りに行く時はね(、)
(、)

「Guild」 Ryuka << 釣り針を何個も持ってたらい
ンベントリが

いっぱいになるからね^^

「Guild」 Orli << あー なるほど^^

それから俺は3回も釣り針を失くし、その度にレイアが合成してく
れた。

ここのギルドのメンバーはみんな良い人だ。

リーダーを筆頭にみんながいろんな事を教えてくれるし、助けられる。

釣竿と釣り針も貰っちゃったし、何かお礼をしたかったけれど

「それはまた今度、新しい人が入ってきたら同じ様に助けてあげて

」

と、ギルドマスターのショウさんに言われた。

“男”だね。

——翌日。

3時限目の体育の時間、今日はフォークダンス。

約一週間後にある体育祭の最後にあるプログラムに

生徒全員参加のフォークダンスがあって、今日はその練習だ。

基本は男子と女子のペア。

しかし、うちのクラスは男子の方が多い。

その為、男同士で踊るという残念なペアが一組出来た。

・・・といっても、一踊りで次の子とチェンジするから
ずっと男同士で踊るワケじゃないけれど。

そして、チェンジを繰り返す事数回。

俺は成瀬さんとペアになった。

成瀬さんは手を繋ぐのが恥ずかしいのか

俺が手を差し出すと少し躊躇いながら掌を重ねた。

しかも、彼女は背が低いから顔を上げてくれない限り

俺とは目も合わない。

もちろん、会話なんてあるはずもなく・・・。

気まずっ。

何か話した方がいいのかな？

・・・かと言って、成瀬さんと話せそうな話題が見つからない。

「痛つ。」

すると、成瀬さんの足が止まった。

あ。

「いゝいめんつ。」

やってもーた・・・。

考えながら踊っていた所為で俺は成瀬さんの足を踏んでしまった。

「大丈夫？ホント、ごめん。」

「うん、大丈夫。」

そこでちょうどチェンジとなり、

成瀬さんは苦笑いしながら俺と手を離れた。

その後、しばらく俺は成瀬さんの姿を目で追った。

幸いにも思いつきり踏んではいなかったらしく、

痛そうな顔もしていないし、足も普通に動かしていた。

—— 昼休憩。

教室で大山と喋っていると成瀬さんの姿が目に入った。

杉田さんと徳永さんが片手にブラシを持ち、

成瀬さんの髪を弄り回している。

成瀬さんの髪は長くて綺麗なストレートだ。

しかも可愛いからどんな髪形も良く似合う。

だからあの二人によくいろんな髪型にされて遊ばれている。

この間はカラーの替わりにティッシュを使って

緩いウェーブにされていた。

今日はおだんごらしい。

そして昼休憩以降、成瀬さんはおだんごのまま

授業を受けていた。

成瀬さんて、頂もきれいだなあー。

俺は授業を受けながら真ん丸いおだんご頭の成瀬さんの

項を見つめていた。

すると、授業が終わって大山はくると俺の方に振り向くと

「なんか、すっげえ視線感じたんだけど。」

と言った。

別におまえを見つめていたわけじゃねえっ。

――夜、ゲームにログインすると目の前にレイアがいた。

レイアは俺に気が付くとエモーションで手を振ってくれた。

そして俺も手を振り返しながら、ふと思った。

レイアって、成瀬さんに似てるなあ。

例えば髪の色は違うけれどストレートの長い髪とか、

可愛い顔とか、背が低いとか。

レイアのキャラクターは女の子のSサイズだからか、

昨日、ギルドメンバーの他の女の子キャラと比べても小さかった。

ちなみに俺のキャラクターはLサイズ。

レイアと並ぶとちょうど俺と成瀬さんと同じくらいの身長差だ。

唯一、成瀬さんと違う点と言えば、人見知りじゃない事ぐらいだろうか。

「耳打ち」 Reia << オーリー、インベントリに空きある？

「耳打ち」 Orli << うん、あるよ

「耳打ち」 Reia << これあげる

レイアはそう言つと俺に何かをトレードで渡してくれた。

「耳打ち」 Reia << 羊のステーキ 食べるとHPとSTRが上がる効果があるから）、）

「耳打ち」 Orli << ありがと^^ 羊しばいてたの？

「耳打ち」 Reia << うん クエストで30匹倒せつて言われて 叩いてたら

いっぱい羊肉をドロップしたから作ったの）、）

「耳打ち」 Orli << あはは そうなんだ

「耳打ち」 Reia << いらなかつたら 売ってね それじや またねー（´、`）

「耳打ち」 Orli << うん また^^ ありがとねー

お互いエモーションでバイバイと手を振り、レイアは白馬に乗って町を出た。

その後、さっそく俺はレイアから貰った『羊のステーキ』を食べて見た。

レイアが言っていた通りHPとSTRが上がり、モンスターを叩いてみると

攻撃力が上がっているから、いつもより撲滅スピードが速かった。

「うほほ、こりゃいいわ。」

俺はパソコンの前で思わず笑った。

これならソロで倒すには少し辛いモンスターも楽に倒せそうだ。

そして、しばらくゴブリンを倒していると綺麗な石をドロップした。

『七色の水晶』

なんだこりゃ？

『羊のステーキ』の食事効果が切れたところで俺は町に戻り、

オークションで『七色の水晶』の値段を見てみた。

なかなかの値段だ。

さらにログアウトしてwikiで『七色の水晶』の事を調べてみると、

“ゴブリンが稀にドロップする宝石”と、あった。

へー、だからオークションでわりと高い値段がついていたのかー。

これで何か作れるのかな？

俺はレイアにお礼も兼ねて何かプレゼントがしたかった。

合成レシピの中から『七色の水晶』を使ったレシピを検索すると

彫金の中に『虹のピアス』というのがあった。

装備効果は特になし。

“特になし”・・・っ!？

しかし、備考欄に“隠し効果で幸運がアップ？”とあった。

なんだこの最後の“？”は。

まあ、あくまで隠し効果だからわからないって事か。

特に変わったアイテムでもないし、レイアからしてみれば
たいした物でもないのかもしれない。

それでも俺はこの『虹のピアス』を作ってみる事にした。

合成するにはもう少しスキルを上げないとダメだけど、

レイアがこの『虹のピアス』をつけた姿を想像しながら

俺はパソコンの電源を切った。

翌日から、俺は少しずつ彫金スキルを上げ始めた。

「耳打ち」 Reia << 何作ってるの？（、、）

スキル上げを始めて一週間。

レベル上げもそっちのけで合成しているとレイアが話しかけてきた。

俺のキャラの前にはレイアが立っていた。

「耳打ち」 O r l i < < 彫金のスキル上げ^^

「耳打ち」 R e i a < < 最近、町にいる事が多いけどずっとやってるの？

「耳打ち」 O r l i < < うん^^ ちょっと作りたいものがあつて

「耳打ち」 R e i a < < 何？（、、）

「耳打ち」 O r l i < < 内緒！^^

「耳打ち」 R e i a < < あ、さては 女の子に指輪でもプレゼントするつもりだなー？

ギクッ！？

「耳打ち」 O r l i < < ちがう、ちがう^^

レイア・・・意外と鋭い？

こういう時、ゲームでよかったと思う。

本人が目の前にいたら、俺はきっと隠しきれないからだ。

「耳打ち」 Orli << 鍛冶で作りたい片手剣があつて、その材料を作るのに

彫金スキルがいるから

「耳打ち」 Reia << あー、なるほどー（、、）

レイアは上手く誤魔化されたく、納得すると

エモーションで応援してくれた。

ただ次の瞬間、レイアの耳のあたりがキラキラと光っている事に気が付いた。

「んっ？」

俺は思わずパソコンのモニターに顔を近づけた。

この光り具合は・・・

『虹のピアス』ではなさそうだけど、高そうなピアスだ。

こんなの今まで装備してなかったよな？

「耳打ち」 O r l i < < レイア、新しいピアス？

「耳打ち」 R e i a < < うん 昨日、マースさんが作ってくれたの（、）

「耳打ち」 O r l i < < へー、どんなピアス？

「耳打ち」 R e i a < < ダイヤのピアスだよ^^

『ダイヤのピアス』、それはピアスの中で一番高い物だ。

しかも、買ったんじゃないくて“作った”とな。

それを作るにはスキルも相当高くなっちゃいけない。

「・・・やーめた。」

なんだかバカバカしくなった。

いくら俺が頑張って彫金スキルを上げて作ったところで、

『ダイヤのピアス』に比べたら『虹のピアス』なんておもちゃだ。

レイアが喜ぶはずがない。

俺は『七色の水晶』をオークションに出品してログアウトした。

——翌日、今日は体育祭。

俺の気持ちとは裏腹にスカッと晴れた。

秋晴れだあー。

「はあー・・・。」

だけでも溜め息が出てくる。

すると、今朝も相変わらずコーヒー牛乳を俺の目の前で飲んでいた大山が話しかけてきた。

「なんだ？朝っぱらから溜め息かよ。」

今日は体育祭だぞ？テンション上げろや。」

「うーん・・・。」

“ 体育祭 ” っただけでテンションが上がれば

こんな溜め息なんてつかねえよ・・・。

「 女の子にでもフラれたみてえな顔して。 」

「 別にフラれたワケじゃねえし。 」

「 んじゃ、なんだよ？ 」

「 んー・・・実はさ・・・ 」

俺は大山に昨夜の事を話した。

「 へー、あの時の子と同じギルドに入ったのかー。 」

んで？ 慧はその子の事、好きになったのか？ 」

「 いや、好きとかそういうのじゃなくてさ・・・。 」

「でも、実際『ダイヤのピアス』を貰ってそれを付けてるの見て、
ショックを受けて、慧は彫金のスキル上げをやめちゃったんだろ
?」

「ん・・・まあ。」

「じゃ、少なくとも気にはなってるって事じゃねえの?」

「うーん・・・」

「確かに自分がプレゼントするつもりで頑張って
スキルを上げてた矢先にあっさり一番高いピアスを
プレゼントされてたのはへこむけどな。」

純粹に何かお礼がしたいって話ならまた何か

別の方法を考えればいいんだし。」

「とは言ってもなー・・・そのマースって奴、

他にもいろいろ合成スキルを上げてるって、この間言ってたから、

何やつても勝てる気しねえんだけど・・・。」

「お前、そんな事言ったら何にもできねえぞ？」

「それはそーなんだけど・・・。」

「てか、俺は『虹のピアス』いいと思うけどな？」

お前がその子の事を想って作ったものなら、

普通は喜んでくれると思うぞ？

逆に喜ばないような子なら、その程度の女って事だよ。」

「・・・それもそうだな。」

確かにその通りだ。

大山にしては珍しく正論を言っている。

てゆーか、よく考えたら俺、レイアの事何も知らないんだよねー。

どこに住んでるとかはもちろん、何歳かとか学生なのか社会人なのか。

レイアの中身の顔だって知らないし、声だって聞いた事もない。

それなのに、こんなに気になっているのは

俺がおかしいんだろうか？

たかがゲームの中のキャラだ。

普通はそんなので恋なんてしないよなあ・・・？

ん？

・・・恋？

“恋”

これって恋なのかーっ？

「おい、大丈夫か？」

ぺちつと大山におでこを叩かれた。

「お、おう。」

大山の言つとおり、マースさんに先を越されたから
ちょっとショックなだけだ。

「おっし！今からテンション上げてくぜっ。」

やっぱ、ゲームの中じゃなくてリアルで恋をしないとなっ。

「今日は全校の女子生徒が見てるからな！。

カッコいいトコ見せて、最後のフォークダンスに賭けるぞ。」

俺は大山と軽く拳を合わせて気合いを入れた。

「あれ？一人足りない。」

午前中の最後の種目、『百足競争』に出る俺と大山が

入場ゲートの横で待機していると体育委員の大里が

人数を数えながら言った。

そして、誰がどの種目に参加するか書かれているリストを見ながら、

「あー、まだ杉田さんが来てないのかー。」

何やってんのかなあー？」

と、眉間に皺を寄せた。

するとそこへ成瀬さんが来た。

「大里くん。」

「あー、成瀬さん、ちょうどいいところに来た。」

杉田さん知らない？次の百足競争に出るはずなんだけど

まだ来てなくて。」

大里がそう言っていると成瀬さんは

「その事なんだけどー・・・実は真沙美ちゃん、

怪我しちゃって、百足競争に出るの無理そうなの。」

と言った。

「えーっ、マジで？さっきのクラス対抗リレー？」

「うん・・・。」

杉田さんは二つ前の『クラス対抗リレー』にも出ていた。

その時、他のクラスの子が転んだのに巻き込まれて

杉田さんも一緒に転んだ。

どうやらその時に足を痛めたらしい。

「うーん・・・どうしよう・・・。」

あ、そうだつ。」

大里はそういつと何か閃いた様に目の前の成瀬さんにやりとしてみせた。

「成瀬さん、代わりに出ない？」

「え。」

「てゆーか、出て？」

「で、でも・・・。」

「午前中最後の種目だし。」

意味わかんねーよ。

「・・・え、と・・・。」

成瀬さんは困ったように言葉に詰まった。

「私、運動神経良くないから、きつと足を引っ張っちゃうし・・・。」

「大丈夫、大丈夫。」

大里はそう言いながらにつこり笑った。

この際、代わりに出てくれるなら誰でもいいのか

完全に上手く丸め込もうとしている。

そして、ちょうどその時、

“次は午前中最後の種目、『百足競争』です。”という、
アナウンスが響いた。

「じゃ、成瀬さん、よろしくうっ！」

大里はそう言つと無理矢理、成瀬さんを『百足競争』に参加する

俺達と一緒に列に押し遣り、「頑張つて〜」と手を振った。

入場行進が始まり、成瀬さんは逃げるに逃げられず
結局、そのまま『百足競争』に出るハメになった。

「最初は“セーの”の合図で右足からね。

後、成瀬さんは杉田さんの代わりだからココね。」

チームリーダーの青山はそう言つと大山と俺の間に
成瀬さんを並べせた。

「う、うん・・・。」

すっかり逃亡意欲を失くした成瀬さんは大人しく
大山の後ろに並んだ。

俺達がスタートする順番になり、リーダーの青山の後ろに
もう一人の女子・瀬川さん、その後ろに大山、

成瀬さん、俺の順に並んだ。

成瀬さんは恥ずかしそうに大山の肩に手を置いた。

そして、俺も成瀬さんの肩に手を置くと

その肩はとても細くて小さかった。

ちっちえーなあー。

背が低い成瀬さんは何もかもが小さいのか

練習の時に触れた杉田さんの肩幅よりも

さらに小さかった。

間もなくして、スタートピストルが鳴り響き、

俺達の百足チームはスタートした。

出だしは好調。

飛び入り参加の成瀬さんも一生懸命、

みんなと歩調を合わせている。

だけど、隣の“ムカデ”が一気に追いついてきた。

お？

ヤバいんじゃないの？

そう思っていると先頭の青山も焦ったのかいきなりスピードアップした。

しかし、号令も何も無しにスピードアップしたもんだから後ろは大変だ。

瀬川さん以降、バランスを崩し、青山も後ろに引つ張られるように体勢を崩した。

まさに“親亀こけたら、子亀もこけた”状態。

「おわっ！」

「きゃんっ！」

「わぁーっ！？」

「きゃっ！？」

「うわっ！？」

後はバツバツと五人仲良く崩れていった。

焦り捲くつている青山はまだみんなの態勢が整っていないのに

再び足を進めようと右足を前に出し、そしてまた全員がこけた。

これ・・・『百足競争』じゃなくて『七転び八起き』じゃないのか？

「青山落ち着けっ。」

「待つてゝ。」

「まだ後ろは立ち上がってないぞー。」

そんな事を言いながら、結局、俺達はその後さらに何度も転んでビ

り。

みんな両膝や両腕に擦り傷を作り、五人で救急テントに

絆創膏を貰いに行った。

「沙耶、大丈夫？ごめんね、まさか私の代わりに

出る事になるなんて思わなかったから・・・」

救急テントに絆創膏を貰いに行くと両肘と両膝に

たくさん擦り傷を作っている成瀬さんの姿を見て、

杉田さんが足を引き摺りながら近づいてきた。

「あー、真沙美ちゃん、動かないほうがいいよ。」

成瀬さんは杉田さんが来るとすぐ近くのイスに座らせた。

杉田さんはさつき『クラス対抗リレー』に出た時に

他のクラスの子が転倒したのに巻き込まれて

その時に思いっきり転んで足を捻ったらしい。

それで救急テントでしばらく休んでいたのだ。

「なんか派手にコケてたね。」

杉田さんはそう言うとチームリーダーの青山を筆頭に

傷だらけの俺達五人を見回した。

こんな時、レイアならすぐに治癒魔法で傷を治してくれるのにな・・・。

・・・て、そもそもレイアはゲームの中のキャラなんだし。

「竹之内くん？」

やや妄想に入り気味だった俺をリアルの世界に戻してくれたのは

成瀬さんの声だった。

「え？」

ちょっとびっくりした。

「足、消毒しないと。」

成瀬さんはそう言っていると俺の両膝と腕の傷口を

綺麗にウェットティッシュで拭いて「ちょっと沁みるよ。」と、

消毒液で傷を消毒し、絆創膏も貼ってくれた。

「ありがとう。」

「うん。」

「成瀬さんは？もう手当てした？」

「うん、さっき真沙美ちゃんが手伝ってくれたの。」

「そっか。」

成瀬さんの足にはいくつか絆創膏が貼ってあった。

っか・・・足、細っ。

紺色の短パンからはスラリと白くて細い足が伸びていた。

半そでの体操服の袖口から伸びている腕も細くて白い。

・・・この人はちゃんとご飯を食べているんだろうか？

そして、俺達“ムカデチーム”五人と杉田さん、

それに徳永さんも合流して一緒に教室で弁当を食べることになった。

男子三人の目の前に女子四人が座り、俺の目の前には成瀬さんが座った。

女の子達の弁当箱に目をやると俺達の弁当箱よりも

一回りも二回りも小さい弁当箱だった。

中身だって俺達のはご飯もギュウギュウに詰めてあるけど、

女の子達のご飯は軽く詰めてあったり、

おむすびがチヨイチヨイと詰められていた。

おかずにしたって俺達のは一つ一つの量が多いけど、

女の子達のは少しずつだ。

これじゃあ、太るわけはないよなあー。

「みてみてー、コレ、新商品出てたから、

買ってみたあー」

しかし、そう言って弁当を平らげた直後に杉田さんが出したのは
お菓子の袋だった。

ついさっき、「お腹いっぱい。」とか言ってなかったか？

「みんなで食べよー。」

・・・で、結局俺達も一緒に食ったワケだけど。

しかも、成瀬さんまでご機嫌顔で食べていた。

女の子って・・・

不思議だ・・・。

——午後からの種目は俺が気を抜いているうちに終わった。

後は最後のフォークダンスのみ。

男子と女子が交互に並ぶと、この間の体育の時間とは違う女子が隣に来た。

あれ？

あ、そうか。

杉田さんが足を挫いてテントで見学してるから、微妙にずれたのか。

そして、その影響で次のチェンジで相手が成瀬さんに

代わるという時・・・

曲がチェンジ！

で、回転方向もチェンジ！

ついさっきまで踊っていた相手ともう一度踊るハメになり、

さらに最悪なことに何度目かのチェンジで大山が俺の相手になった。

「うわーっ、おまえかよーっ。」

「それはこっちのセリフだ、バカ。」

「早くチェンジ来ねえかなー。」

「俺も同感。」

そんな話を話していると・・・

曲が終わった。

フォークダンス終了・・・。

「・・・。」

「・・・。」

俺と大山は無言で見つめ合い、溜め息をついた。

きつと今、あいつも俺と同じ事を思っているに違いない。

“なんでラストダンスがこいつなんだよっ！？”

——その日の夜。

成瀬さんを見ていて、レイアの事を思い出してから
ずっとレイアと話がしたかった。

それにラストダンスの相手が“アレ”だったし。

レイアに会いたくてゲームにログインすると、ポストにお金が届いていた。

しかも結構な金額だ。

「なんだ？　このお金」

画面の前で首を傾げながら送り主と詳細を確認すると

『七色の水晶』の落札金額だった。

「あっちゃー……、売れちゃったのかぁー」

今朝、大山に「お前がその子の事を想って作ったものなら、

普通は喜んでくれると思うぞ？」と、言われて

もう一度作る気になって、帰ったらオークションの

出品を取り消そうと思っていたのに……。

（まあ、しょうがないか……）

売れてしまったものは仕方がない。

まだ、レイアもログインしていないし、

ゴブリンを叩きながら待つことにするか。

俺は諦めてもう一度ゴブリンのドロップを狙う事にした。

そして、ゴブリンを叩くこと二時間――。

もう随分ゴブリンを倒しているのに

『七色の水晶』をちっともドロップしない。

むしろ、こっちが滅入って倒れそうだ。

しかも、レイアもまだ来ない。

時計をみるともう午後１１時だった。

レイアはいつも俺と同じくらいの時間、１１時半にゲームを終わる。

休みの前の日は夜中までやっている事もあるけれど、明日は月曜日だ。

俺は明日、体育祭の代休で休みだけど普通は学校や仕事がある。

（レイアもきつと学校か仕事なんだろうなー）

「あゝあ……レイアは来ねえし、ゴブリンは

『七色の水晶』落とさねえし……、

もう寝ようかなあー……」

体育祭で疲れたし。

なんだかドツと疲れが出てきた。

そして、俺はベッドにダイブすると3秒で意識が無くなった。

——翌日。

昼飯を食った後、ゲームにログインした。

「Guild」 Reia << あれ？オーリー？

すると、レイアもログインしていた。

（お？）

「Guild」 Orli << レイア なんているの？

「Guild」 Reia << 今日、学校お休みなの（、、）

「Guild」 Orli << へー レイアもなんだ 俺も今日休み^^

「Guild」 Reia << 誰もいないと思ってたからびっくりした（、、）

[Guild] Orli << うんうん^^

[Guild] Reia << オーリーって、学生？

[Guild] Orli << そうだよ 高校生

[Guild] Reia << えー 高校生だったの？

[Guild] Orli << 意外？

[Guild] Reia << うん 大学生かなーって思ってた(´、`)

[Guild] Orli << レイアは？ 大学生？

[Guild] Reia << ううん 私も高校生だよ

[Guild] Orli << 何年生？

[Guild] Reia << 一年生

(なにーっ!?)

[Guild] Orli << なんだ 実は俺と同年なんじやん^^

「Guild」 Reia << オーリーも一年生だったの？

。□。；

「Guild」 Orli << うん

「Guild」 Reia << て、今日学校休みってズル休み？（ー、）

「Guild」 Orli << あはは ちがう、ちがう^^
うちの学校

昨日、体育祭があつて今日はその代休

「Guild」 Reia << えー 私もだよ。□。；

「Guild」 Orli << うひゃ 偶然^^

（レイアの学校も昨日、体育祭があつたのかー。

それで昨日は疲れてゲームに入ってこなかったのかな？

この時期はどこ的高校もやる事は一緒だなー）

でも、そのおかげでレイアと話せるし、ちょっと嬉しい。

「よっし！ この勢いで『七色の水晶』も、げっとしてやるぜっ」

俄然、やる気が出てきた俺は再びゴブリンを叩き始めた。

そして、ゴブリンを叩き始めて5分。

昨夜とはうってかわって意外にもあっさりと

『七色の水晶』が出た。

長期戦を覚悟していた俺はそのまま勢いに乗って

ゴブリンを叩き続けた。

すると、立て続けに『七色の水晶』をドロップした。

（今日はやけに気前がいいじゃねえかー）

いや、レイアのおかげかもな。

レイアは俺にとって“幸運アップ”の効果があるのかもしれない。

「む、あの二人……どこにいるんだ？」

夜、ゲームにログインしてギルドメンバー一覧を開くと、

レイアとマースさんが同じ場所にいてパーティを組んでいた。

ギルドメンバーの一覧には、今誰がログインしているかや

レベル、種族、職業はもちろん、現在どこにいるのか、

パーティを組んでいるのかなんかもわかる。

そして、レイアとマースさんは今二人でパーティを組み、

俺の知らない場所にいた。

「Guild」 Orli << レイアとマースさんがいる場所
ってどこ？

「Guild」 Reia << 空中庭園っていう場所だよ（、
、）

「Guild」 Orli << ヘー 俺も行っている？^^

「Guild」 Mars << オーリーがここに来るにはもっ

とレベルあげないと無理だと思うよ

「Guild」 Orli << その辺のモンスターで そんなに強いのか？

「Guild」 Mars << ソロなら60くらいないとキツいかな

「Guild」 Orli << (。□。;

「Guild」 Reia << 迎えに行こうか？) (

「Guild」 Mars << 来るのか？

(行っちゃ悪いのかよ……)

「耳打ち」 Orli << 俺、行かないほうがいいっかい？

もしかして、“おジャマ”なのかな？

そう思ってレイアにこっそり話しかけてみた。

「耳打ち」 Reia << そんな事ないよ(、、)

(なんだ、別に二人で特別何かを話してるワケじゃないんだ)

「耳打ち」 Orli << じゃあ、行く^^

「Guild」 Reia << オーリー ユナ神殿わかる？

「Guild」 Orli << うん

「Guild」 Reia << じゃあ その入口で待ってるから(、、)

「Guild」 Orli << うん^^

マースさんは何も言わなかったけど、とりあえず俺は『ユナ神殿』に向かった。

『ユナ神殿』に着くと、入口にレイアとマースさんが立っていた。

俺はエモーションで手を振りながら近づいた。

すると、すぐ傍にいた神官の亡霊みたいなアンデッドのモンスターにからまれた。

「うほっ」

このモンスターもどうやら俺がソロで倒すには無理そうだ。

モンスターネームが全て赤になっている。

「Guild」 Reia << オーリー パーティ組もう（、

レイアは俺をパーティーに誘うと、すぐに回復魔法でHPを回復してくれた。

マースさんは一足遅れてモンスターに殴りかかった。

（なんか……どー見ても「ちっ、仕方がねえな」で、感じなんだよなー。

まあ、からまれた俺が悪いんだけど）

マースさんはさすがに俺よりもはるかにレベルが高いだけあって

次々とモンスターをなんなく倒していった。

そして、さらに言うとレイアよりもレベルが高い。

（あゝあ……、俺カッコ悪いー）

ホントなら戦士の俺は魔道士のレイアの盾になって守る立場なのに……

今の俺はレイアにも、マースさんにも守られている。

「くっそー、手っ取り早くレベルあがんねえかなー」

レベルをもっともつと上げて、早くレイアを守れるようになりたい。

早くレイアといろんな場所に行きたい。

ひたすらモンスターを叩きながら、俺はそんな事を考えていた。

そして、『空中庭園』に着くまで、俺は何度もモンスターにからまれた。

その度にレイアを守っているマースさんに腹が立ち、

そのマースさんに守られている自分に腹が立ち……

そんなだから、もちろん『空中庭園』に着いてからのことなんて

憶えているはずもなく。

やっぱり来なきゃよかったかな……とさえ、思った。

——次の日。

レイアとマースさんはゲームにはログインして来なかった。

それは二人でチャットルームにいたから。

このゲームにはユーザー同士がゲームに入らなくても

チャットだけする事が出来る“チャットルーム”がある。

例えば、ゲームのメンテナンスの合い間とか、

特定の人だけでゆっくり話がしたい時とか。

（二人で何話してるのかな？）

レイアとマースさんがいるチャットルームには“鍵”が掛かって
いた。

それは誰にも邪魔されたくないと言う証拠だ。

（やっぱり俺、昨日二人の邪魔しちゃったのかな？）

レイアはともかくきつとマースさんにとって俺は邪魔だったんだろう。

じゃなきゃ、こんなあからさまに次の日に二人だけで

チャットルームに行くはずがない。

「ちくしょー」

モニターの前でそう言ってみたものの、今の俺は何も出来ない。

（結局、レベル上げを頑張るしかないのか……）

もっとレベルを上げて、レイアを守ってやれるようになったら

俺もどこかゆっくり出来るところにレイアを誘おう。

「オーリー、最近全然話してくれないなあー……」

パソコンのモニターの前、私は頬杖をつきながら

ギルドメンバーの一覧を見つめていた。

最近、オーリーはずっとレベリングパーティをしている。

前はギルドのみんなと会話しながらソロでレベルを

上げている事がほとんどだった。

ゲームが終わる時間も私と同じくらいだったのが

ここ最近はずっと夜中までやっているらしい。

昨日、ギルドマスターのショウさんに聞くとそう教えてくれた。

（なんか……つままないな……）

オーリーと話したいのに……。

そして、私が“つまらない”と感じている理由がもう一つ。

「耳打ち」 Mars << レイア チャットルーム行かない？

マースさんからの誘い。

「耳打ち」 Reia << 今日はもう落ちるから ごめんね；

「耳打ち」 Mars << そっか じゃ、明日は？

「耳打ち」 Reia << ちょっと当分ゲームに入れそうにな
いかも

私は嘘をついた。

マースさんは悪い人ではないし、嫌いではないけれど

苦手な人物になってしまった。

何故かと言うと、この間まではギルド会話で普通に話すだけだったのに

体育祭の次の日に二人で『空中庭園』に行こうと誘われた。

『空中庭園』に着くとその後すぐにオーリーも来る事になって

マースさんの機嫌が悪くなった。

すると、次の日チャットルームに誘われた。

チャットルームには“鍵”まで掛けられ、

完全に外部からのアクセスをシャットアウトされた。

これじゃあ、オーリーも入ってこられない。

マースさんは最初のうちは世間話をしていたものの、

そのうち「どこに住んでるの？」と聞いて来た。

私が都内だと答えると「今度会おうよ？ 携帯の番号教えて」

と、言って来た。

その場はなんとか「携帯持っていないから」と嘘をついて誤魔化した。

それ以来、なるべくレベリングパーティをしたり、

ソロで出来るクエストやミッションを進めていたおかげで

誘われることもなかったけど、今日再びチャットルームに誘われ、

私はこれ以上、上手く逃げる自信がなかった。

だから当分、ゲームから離れる事にした――。

それから一ヶ月程経った頃。

もうすぐハロウィン。

今日からゲームの中でイベントがある。

イベント用の簡単なクエストをクリアするといろんなアイテムが貰える。

ソロでやると一回目は魔女のトンがり帽子、二回目は魔女のローブ、

三回目は魔女の靴、四回目は先端に蝙蝠が付いている杖、

五回目はジャックのランタン……とクリアした回数で

貰えるアイテムが違う。

ちなみに♫のキャラクターは魔女じゃなくて吸血鬼。

吸血鬼のシルクハットとか吸血鬼のマント……とか。

そして男女ペアのパーティでクエストをクリアすると

それぞれのキャラクター名が入ったペアリングが貰える。

（オーリーは誰かとやるのかなあ？）

私は久しぶりにゲームを起動した。

するとオーリーからメッセージが届いていた。

- - - - -

最近、全然入ってこないけど何かあったの？

もし、ハロウィンイベントやってる間に入って来れたら

一緒にイベントクエストやろうよ。

待ってるから。

- - - - -

（オーリー、私の事、心配してくれていたんだ……）

それに……

“待ってるから”

その言葉がすごく嬉しかった。

「Guild」 Reia << こんばんはー（、、）

私はオーリーからのメッセージを読んだ後、すぐにログインした。

（オーリー、いるかな？）

「Guild」 Orli << こんばんは^^ 久しぶり

すると、すぐにオーリーが挨拶を返してくれ、

その後にギルドメンバーもいつものように返してくれた。

「Guild」 Bunnbun << あー、レイアだー（、、）
ノ

「Guild」 Aya << おひさーw

「Guild」 Ryuka << こんばんは^^

「Guild」 Sho << おう^^

「Guild」 Mars << こんばんは

「耳打ち」 Reia << オーリー 今どこ？

「耳打ち」 Orli << 空中庭園だよ^^

(え……？)

『空中庭園』 といえば、戦士でもレベル60以上じゃないと
とてもソロでは行けない場所だ。

この間は私とマースさんが『ユナ神殿』まで迎えに行ったけれど……

「耳打ち」 Reia << 一人？

「耳打ち」 Orli << うん^^

（オーリー、一体レベルいくつになったの？）

ギルドメンバーの一覧を見るとオーリーはレベル70になっていた。

（うっそーっ!?!）

「耳打ち」 Reia << オーリー いつの間にこんなレベルに?（。□。 ;

「耳打ち」 Orii << ヘー びっくりした? ^^

「耳打ち」 Reia << うん すごい（。□。 ;

（まさか、私がゲームから離れていた一ヶ月間、

ずっとレベリングパーティーしてたの?）

「耳打ち」 O r l i < < レイア ハロウインのカップルイベント一緒にやらない？

「耳打ち」 R e i a < < うん やりたい（、、）

「耳打ち」 O r l i < < じゃ、バールのイベントNPCの前で待つてる^^

「耳打ち」 R e i a < < うん（、、）

『バール』の町に着いてハロウィンイベントのNPCの前に行くと
オーリーがエモーションで手を振っていた。

そして、二人でパーティを組んでさっそくクエスト進行。

クエストの内容は至って簡単。

クエストを受けるとイベント用のお城のダンジョンに飛ばされ、

男女それぞれ違う入口から入り、廊下を道なりに進んだ先に宝箱が置いてある。

それを開けると中には指示書が入っていて

♂キャラの指示書には♀キャラの進行方向が書いてあり、

♀キャラの指示書には♂キャラの進行方向が書いてある。

お城の中は迷路のようになっていて

それぞれが相手から進行方向を教えてもらわないと

進めない……というワケだ。

二人で協力して進むとまた次の宝箱の中に指示書があつて、

教えあつて……それを繰り返して最上階にある最後の宝箱から

アイテムを取ってくる事ができればクリア……というワケだ。

私とオーリーは、なんなく最上階まで辿り着き、

アイテムを手に入れてペアリングをゲットした。

蝙蝠のデザインのかわいい指輪だ。

「Party」 Orli << やった げつと ♪

「Party」 Reia << うん(´、´、´)

さっそく装備。

画面上のグラフィックは変わらないけれど、

装備効果はペアリングの相手とパーティを組んでいる場合、

自動的にHPとMPを徐々に回復してくれるというもの。

好きな人と一緒にいると元気も出てくるし、心も温くなる。

きっとそんな感じなんだろうな……。

その後も私とオーリーは一緒にソロ用のイベントクエストもやった。

クエストが全て終わると戦士のオーリーは“吸血鬼”になっていた。

「Party」 Reia << その格好、思ったより似合ってる(、、)

「Party」 Orli << 血吸っちゃうぞっっ^^

「Party」 Reia << 十字架翳しちゃうぞっっ
(、

「Party」 Orli << やめてー^^

こんな風にオーリーとおバカな会話するのはいつ以来かな？

「Party」 Orli << てか、レイアもその格好似合っ
てるよ^^

「Party」 Reia << でもなんかこの格好ちょっと恥
ずかしい；

「Party」 Orli << いつもはそんなに足出てないも
んな？

オーリーの言うとおり、いつも戦闘用で着ているローブは
踝のあたりまで隠れるくらいだ。

だけど、このイベントで貰ったローブはパフスリーブの

黒い上着とオレンジ色のかぼちゃみたいなもこもこパンツ。

“ローブ”とは名ばかりで、お尻にはジャックのランタンと

同じ顔がデザインされているものだった。

後は黒いマントもセットだ。

「Party」 Orli << スクリーンショット撮らせて^^

「Party」 Reia << うん 私も撮りたい(´、`)

私とオーリーは吸血鬼と魔女の格好のまま、

並んでスクリーンショットを撮った。

そして、これが私とオーリーの初めてのツーショットだった。

「Party」 Orli << ところでレイア

「Party」 Reia << うん？

「Party」 Orli << 受け取って欲しいものがあるんだけど

ハロウィンイベントのクエストをクリアした後、

二人で『空中庭園』に行つて景色を眺めながら話していると
オーリーが私に何かを渡そうとトレードを申し込んできた。

(……？)

(受け取って欲しい物？)

(何だろう？)

トレードに应付すると、オーリーは私に『虹のピアス』をくれた。

「Party」 Orli < マースさんに貰ったダイアのピアスに比べればガラクタなんだけど、

レイアには今までいっぱいいろんな物貰ってるし、お礼って言うか、感謝の意味で。

受け取ってくれるかな？

（『虹のピアス』って……）

それは、装備効果は特にないけれど、隠し効果で幸運がアップする
というものだった。

そして、その材料の“七色の宝石”はゴブリンからのレアドロップ。
競売でもあまり取引されていない宝石だ。

それに『虹のピアス』を作るにしたって、結構な彫金スキルが必要

で……

「Party」 Reia << ありがとう オーリー（、）

すごく……すごく嬉しかった。

私はさっそくその場で『虹のピアス』を装備した。

「Party」 Reia << えへへー、どうかな？（、）

「Party」 Orli << うん、すごく似合ってる^^
可愛いよ

“可愛いよ”

オーリーのその言葉がものすごく嬉しかった。

「Party」 Reia << オーリー ありがとう すごく
嬉しい

マースさんから『ダイアのピアス』をプレゼントされた時よりも、
ずっと嬉しかった。

「Party」 Orli << ホント？

「Party」 Reia << うん（、）

「Party」 Orli << だって、マースさんのダイアの
ピアスより全然ちやちいよ？

確かに、傍から見ればちやちいのもかもしれない。

でも、オーリーから『虹のピアス』を受け取った瞬間、
ものすごく、ものすごく温かい気持ちが伝わってきた。

「Party」 Reia << 今までで一番嬉しいプレゼント

だよ（、、）

だって……多分、オーリーはこの『虹のピアス』を作るのに
ものすごく時間をかけたはずだ。

オーリーの性格からして材料も全て自分で集めて作ったのだろう。
きっと、マースさんと違ってオークションで材料を手っ取り早く揃
えたりなんかしない。

ゴブリンを叩いて、他の材料の鉱石も鉱山で採掘して……

それから彫金スキルを一生懸命上げていたのだった……

オーリーは照れていたのかそれからしばらく黙っていた。

でも、それは私にとって全然気まずいとかじゃなくて
むしろ、心地の良いもので……

見慣れているはずの『空中庭園』からの眺めも新鮮に見えた――。

マースさんと一緒に眺めていた時とは違う景色。

たかがゲームの中のキャラだけど、

オーリーといると一番自分らしくいられる気がした。

「おっはよっ」

「お？ 慧、早いじゃん。てか、今までがおかしかったのか」

「そそ、今日からまた正常に戻った」

大山の言つとおり、俺はレイアとマースさんが

二人きりでチャットルームに行つてから

早くレベルを上げたくてずっとゲームばかりやっていた。

平日は学校から帰った後、速攻で夕飯と風呂を済ませ、

夜中までレベリングパーティをしていた。

だから朝もこの一ヶ月間は遅刻ギリギリだった。

授業だって午前中はほとんど寝ていたし、

休日も朝から晩までゲームばかり。

しかし、その甲斐あって一昨日ようやくレベルも70になった。

でも、レイアはその間ずっとゲームに入って来ていなかった。

何かあったのかな？

気になった俺はハロウィンイベントが始まった日に

レイアにメッセージを送った。

このメッセージ、ハロウィンイベントが終わるまでに

読んでくれるだろうか？

レイアとハロウィンのイベントクエストを一緒にやりたい。

それと……

『虹のピラス』を渡したい。

レベル上げと平行して少しずつだけど俺は彫金のスキルも再び上げ始めた。

それでやっと『虹のピラス』が完成した。

俺はゲームにログインして『空中庭園』に向い、

そこから見える景色を眺めながらレイアを待っていた。

約一ヶ月前は一人じゃ来られなかったあの場所だ。

時間が経つのがやけに遅く感じる。

レイア、一緒にイベントクエストをやってくれるかなあ？

もうマースさんと約束してるかな？

『虹のピアス』も受け取ってくれるかな……？

「Guild Reia << こんばんはー（、、（

そして午後8時過ぎ、レイアがいつもログインしてくる時間に来た――。

「なんかいい事あったのか？」

昨夜の事を思い出しているといつの間にか大山が俺の顔を覗き込んでいた。

「レイアちゃんだろ？」

大山はそうなんだろう？ と、言った顔をした。

「うん」

「わかりやすつ。んで？ 何があつたんだ？」

「昨日、ハロウィンのイベントクエスト一緒にやってさ、

その報酬でペアリング貰ったんだ」

「お、やったじゃん」

「うん、俺もマースさんともう約束してるかなー？ とか

思ってたんだけど、一緒にイベントクエやるうつて言ったら、

即OKしてくれたから何も約束とかしてなかったっぽい」

「それでそれで？」

「後、『虹のピアス』も渡した」

「おおーっ。で？　で？　彼女の反応はどうだったんだ？」

「すっげえ喜んでくれたよ」

「やっぱり、俺が言ったとおりだろ？」

お前が彼女の事を想って作ったものなら

喜んでくれるはずだって」

「うん、お前のおかげだよ、サンキュー」

「てか、お前やっぱりその子の事が好きなんじゃない？」

「でも、相手はゲームの中のキャラだぞ？」

「そうだけど、そのキャラの中身は高1の女の子なんだろう？」

「うん」

「確かに知り合ったきっかけはゲームだけど、

俺はそういう恋愛も有りだと思うな」

「うーん……」

自分でもレイアの事は好きなんだと思う。

でも、実は今、気になっている女の子がもう一人いる。

その子の事はまだ大山には言っていない。

大山も知っている子だから。

同じ学校の同じ学年……クラスも同じ。

最近、ようやく少しずつだけ話すようになった女の子。

少し離れた前の席にいる成瀬さんだ。

レイアも好き。

それでいて成瀬さんの事も気になっている。

……俺は浮気性なんだろうか――？

オーリーとハロウィンのカップルクエストをやった翌日、
町の中でマースさんに会った。

「耳打ち」 M a r s < < レイア そのピアス何？

私は、昨日オーリーから貰った『虹のピアス』を着けていた。
そして、マースさんがすぐにそれに気付き、耳打ちしてきた。

「耳打ち」 R e i a < < 虹のピアス

「耳打ち」 M a r s < < へえー、買ったの？

「耳打ち」 R e i a < < ううん 貰ったの

「耳打ち」 M a r s < < ちょっと貸して？ 俺も装備してみ
たい^^

「耳打ち」 R e i a < < うん いいよ

私はマースさんに『虹のピアス』を渡した。

マースさんは『虹のピアス』を装備すると、

「耳打ち」 Mars << これ 誰に貰ったの？

と、聞いてきた。

「耳打ち」 Reia << オーリー

「耳打ち」 Mars << ふーん

マースさんはそう言うと、再び『虹のピアス』からいつも着けている耳装備に変えた。

「耳打ち」 Mars << レイア ハロウィンのカップルクエ

今から一緒にやろうよ

「耳打ち」 Reia << ごめん もっちゃった；

「耳打ち」 Mars << 誰と？

「……」

（正直に答えたほうがいいのかな？）

「耳打ち」 Mars << もしかして オーリー？ 昨日、ずっと一緒にいたみたいだけど

（バレてたんだ……）

マースさんは昨日、レベリングパーティをやっていた。

だから私とオーリーが一緒にいるのも気付いていないと思っていたのに。

「耳打ち」 Reia << うん

「耳打ち」 Mars << じゃ、それ捨てて

(え?)

「耳打ち」 Mars << レイアが持つてるオーリーの名前が入ったリングを捨てれば

俺とカップルクエもう一回できるから

「耳打ち」 Reia << そんな事できないよ

「耳打ち」 Mars << いいじゃん別に

「耳打ち」 Reia << それより 虹のピアス返して?

マースさんは『虹のピアス』を外して持ったまま、まだ返してくれていない。

「耳打ち」 Mars << オーリーのリング捨てて俺とカップルクエやってくれたら返してあげる

(何それ……)

「耳打ち」 Reia << 返して

「耳打ち」 Mars << だから俺とクエやってくれたらね

(どうしよう……)

マースさんとカップルクエをやったとしてもオーリーとのペアリングが無くなってしまう。

かと言って、このままだと『虹のピアス』を返して貰えない。

(せっかくオーリーが作ってくれたのに……)

「耳打ち」 Reia << マースさん そのピアス大事なものだから返して

「耳打ち」 Mars << 俺とクエやる気ないんだ？

マースさんはそう聞かれ、私は何も答えられないでいた。

「耳打ち」 Mars << なら、もういいや。虹のピアスはまだ捨てたよ

「え、うそ……っ！」

私はパソコンの前でチャットのログを見直した。

“虹のピアスはもう捨てたよ”

何度見直してもログには残っている文字は変わらなかった。

（捨てた……で、そんな……酷い）

「耳打ち」 Reia << そのピアス オーリーが一生懸命作ってくれたものなんだよ？

時間だつてもものすごく掛かつてたのに

「耳打ち」 Mars << 俺とクエやってくれたら あんなものいくらだつて

作ってあげるよ。気が変わったら声掛けて じゃーね

マースさんはそう言うとき私の前から姿を消した。

まさか、マースさんがこんな酷い事をする人だったなんて思わなかった。

こんな事なら『虹のピアス』を渡さなきゃよかった……。

私は簡単にピアスを渡してしまった事を後悔した。

しばらくその場でどうすればいいのか考えていると

「耳打ち」 O r l i < < レイア発見^^

と、オーリーに話しかけられた。

私のキャラクターの前にはオーリーが立っていた。

エモーションで手を振っている。

とりあえず私も手を振り返したけれど……

（『虹のピアス』を事、なんて言おう……？）

素直に話してもオーリーが気を悪くするだけだし、

それに私自身、まだどうすればいいのかわからない。

何か別の解決方法があるかもしれないし。

私はそのままログアウトする事にした。

今はオーリーとも顔を合わせたくない。

(ごめんね……オーリー)

「レイア、今日も来なかったなー」

夜11時半、いつものようにゲームからログアウトし、

俺はここ一週間、ずっとログインしていない

レイアの事が気になっていた。

そして俺にはもう一つ気になっている事があった。

それは成瀬さんの事だ。

最近、彼女の様子がおかしい。

元々大人しい方だけどここ数日、輪をかけて大人しかった。

——翌日。

今日は俺が日直の日だった。

女子の日直は成瀬さんと仲の良い徳永さんだ。

「成瀬さんとケンカでもしたの？」

1時限目が終わった休憩時間、成瀬さんの事が気になっていた俺は徳永さんと並んで黒板の文字を消しながらそれとなく聞いてみた。

「ううん、してない。なんで？」

「……いや、別に深い意味はないんだけど、

成瀬さん最近、徳永さん達ともあんまり

しゃべってないみたいだから」

（それなら体調でも悪いのかな？）

「なんかねー、ちょっとショックな事があったみたい」

「ショックな事？」

「うん、沙耶はね、ああ見えて実はゲーム好きなんだけど

今やってるゲームでなんか大事にしてたアイテムを

失くしちゃったとか言ってたよ」

（ゲーム？ あの成瀬さんが？）

「私はゲームとかやらないから、それがどっいう物なのか

わかんないんだけど、仲の良い男の子から貰ったものだって言っ

てた」

「それってオンラインゲーム？」

「うん、そうみたい」

「成瀬さんがねえ……」

「沙耶、ゲームなら相手の顔が見えないから、
そんなに緊張せずに話せるんだって」

「あー、なるほどね」

（てか、“仲の良い男の子から貰ったもの”で、
失くしてショックな物って……）

（もしかして……指輪とか？）

「そのアイテムってもう手に入らない物なの？」

「ううん、そんな事はないって言ってたけど、

すごく時間をかけて一生懸命作ってくれたものだから、

それを失くしたのがショックなんだって」

（それは確かにショックだな）

「それでね、失くしたことをその男の子に言い出す勇気がなくて、
どうしようか悩んでるみたい」

（それで最近ずっと元気がなかったのか……）

成瀬さんが元気がない理由は俺の予想していたのとはかなり違っていた。

まさか、あの成瀬さんがオンラインゲームなんてやっているとは思っても見なかった。

それに“仲の良い男の子”がいるなんて……

（どんな奴なんだろ？）

黒板を消し終わって、自分の席に戻る途中、
成瀬さんをちらりと横目で見てみた。

思い詰めた顔をしている。

成瀬さんがなくしたアイテムって、

そんなに大切なものだったのかな――？

——それから更に一週間が過ぎ、

レイアがゲームに入ってきた。

しかし、レイアがログインした途端、

マースさんがチャットルームに連れて行った。

（レイアと話したかったのに……）

そして案の定、マースさんはチャットルームに鍵をかけた。

「まだ……」

俺は諦めてソロでレベル上げをしようと

『ガルディア砂丘』へ向かった。

レイアがログインして来なかった間、

俺はずっとレベル上げばかりやっていた。

そのおかげでレベルも81になり、やっとレベル83のレイアに近づいた。

これでレイアと一緒にレベリングパーティが出来る。

そう思っていたのに……。

そうして、『ガルディア砂丘』でサソリを狩ること30分。

順調に一匹ずつ狩っていると、運悪く目の前に新たにサソリがPOPした。

「げ」

そう言った時には既に遅く、POPしたサソリがリンクして、

俺は二匹同時に相手をするハメになった。

ここは一匹だけでギリギリなのにー。

「あー、やべえー」

攻撃力の高いサソリに見る見る俺のキャラクターのHPは削られていき、

もう逃げるしかないのか？ と、思ったその時……

俺のHPが回復した。

どこからか治癒魔法がかけられたのだ。

「助かったー」

そして、防御力アップと攻撃力アップ、

攻撃速度アップや命中率アップの魔法が次々にかけられた。

画面にステータスアップのアイコンがいっぱい並んだ。

おかげで俺は無事にサソリを二匹とも倒せた。

画面をスクロールして魔法をかけてくれた人を捜していると
そこには髪の長い女の子の姿があった。

「あ……レイア……ッ」

「耳打ち」 Orli << ありがと 助かった^^

レイアはいつの間にかチャットルームから出て、俺がいる『ガルディア砂丘』に来ていた。

「耳打ち」 R a i a < < いえいえ ^^

だけど、俺を助けられてくれたのは実はレイアじゃなかった。

よく見るとそれはレイアと同じフェイスタイプで

同じ髪型のキャラクターだった。

ただ髪の色がちょっと違う。

俺と同じブルーシルバーだ。

それにギルドメンバーの一覧を見てみるとレイアはまだ

チャットルームにいた。

今度はショウさんと二人で話しているみたいだ。

ルーム名の横にまた鍵マークが付いている。

「あ？」

（なーんだ、レイアじゃなかったのか……）

（……がっかり）

「耳打ち」 R a i a < < レベルいくつですか？

しかも俺を助けてくれた子は名前まで似ていた。

（“ R a i a ”？）

） “ R e i a ” じゃなくて？

「耳打ち」 O r l i < < 8 1

「耳打ち」 R a i a < < レベル上げ？

「耳打ち」 O r l i < < うん

「耳打ち」 R a i a < < じゃあ、よかったら一緒にレベル上げしませんか？ 私81なんで^^

「耳打ち」 O r l i < < うん^^

がっかりしたけれど、俺はその子と一緒にレベル上げをする事にした。

せっかくこうして出会えた訳だし。

その子は“ライア”といって、とてもいい子だった。

一緒にサソリを狩ってる時もお互いのギルドの人達の事や

ソロの狩り場の穴場とか景色が綺麗な場所とかいろんな事を話しながら狩った。

いつもはただ一人で黙々とモンスターを叩くだけの作業だったレベル上げが今日は楽しい。

そして、ライアも俺と同じ高校一年生なんだという話になり、

「へえー、そーなんだー」なんて事を言っていると

サソリが5匹も大リンクしていた。

「Party」 Orli < < うわっ 5匹って；

「Party」 Raia < < やばい テレポートするね

ライアは素早く詠唱を始めた。

しかし、どんなに俺が頑張ってもサソリ5匹を惹きつけてはおけない。

テレポート魔法の詠唱時間は長く、詠唱中にライアも攻撃されて途中で中断されてしまった。

俺を死なせないように治癒魔法をかけてくれたりしながら

何度もテレポートしようとまた詠唱を始めるけれど

やっぱりサソリの攻撃で逃げることも出来ずにいた。

……で、そんな事を繰り返すこと数回。

俺とライアのパーティはとうとうサソリ5匹に倒された。

「Party」 Orli << あはははー 全滅^^

「Party」 Raia << ごめーん 私が後ろにPOPしたの気付かずに

目の前のサソリに殴りかかったから……

「Party」 Orli << いやいや 俺がもっと上手く立ち回ればよかったんだけど；

「Party」 Raia << てか、どうしよう？ このまま

誰かが通りかかるの待つ？

「Party」 Orli << うーん、俺はもうそろそろ落ちるから このまま復活ポイントに帰ろうかな

「Party」 Raia << じゃあ 私もそうする^^

俺とライアはパーティを組んだままお互い復活ポイントに戻った。

俺は『ガルディア砂丘』に一番近い町、ライアはそこから少し離れた町に帰った。

「Party」 Raia << 今日は楽しかった ありがとう
^^

「Party」 Orli << こっちこそ ありがとう^^
楽しかったよ

「Party」 Raia << オーリー よかったらフレンドになつて貰えるかな？

「Party」 Orli << うん もちろん^^

名前も姿もレイアとよく似た女の子。

でも、中身はまったくの別人。

また一人、俺のフレンドリストに名前が増えた――。

それから数日間、俺は時々ライアとパーティを組んで

レベル上げやクエスト、ミッション、アイテム狩りとか、

後は普段ソロでは行けない様な場所へ、

合成に必要な素材集めにも行ったりしていた。

そして今夜も一緒にパーティを組んでどこかへ行こうかな？

と思いつつ、ゲームを起動するとレイアからメッセージが届いていた。

- - - - -

No.16のチャットルームで待ってます。

パスワードは「reia16」です。

- - - - -

（なんだろう？）

わざわざ鍵までかけるって事は

他人に聞かれたくない話なのか？

不思議に思いながら俺はとりあえず

レイアがいるチャットルームに入った。

O r l i < こんにちは^^

レイアとは二人きりでよく話しているけれど、

こうして鍵のかかったチャットルームで話すのは初めてだ。

ちょっとドキドキする。

R e i a < こんにちは

レイアも緊張しているのか、呼び出したわりにいつもの顔文字がない。

(????)

何か様子が変だな？ と、思いつつ……

しかし、ここで俺がどうしたの？ と、聞くのも如何なものか……？

Reia < あのね 私、オーリーに謝らなきゃいけない事があるの

すると、しばらくの沈黙の後、ようやくレイアが話を切り出した。

(謝る?)

O r l i < 何？^^

R e i a < 虹のピアスの事なんだけど

O r l i < うん

R e i a < 実は失くしちゃったの

(え……)

(マジカー？)

O r l i < まちがえて ポイしちゃった？

R e i a < ううん そうじゃなくて マースさんに装備してみたいから

ちよつとだけ貸してって言われて渡しちゃって

O r l i < 返してくれないの？

R e i a < うん 返してって言ったら ハロウィンのカップ

ルクエ一緒にやろっつ言われて

もうオーリーとやったからって言ったんだけど、それならオーリーの指輪を捨てれば

自分ともう一回出来るからって言われて

O r l i < 俺の指輪 捨てなかったんだ？

R e i a < うん

O r l i < どうして？

R e i a < だって 私はマースさんのペアリングなんて欲しくなかったから

O r l i < そっか それでマースさんは虹のピアス持ったまま？

R e i a < ううん、俺とカップルクエストする気がないならもういいって言うって

虹のピアスも捨てたからって言われたの だから ごめんね

そっいう事が。

（てか、マースさんて性格悪いなー）

O r l i < レイアは悪くないよ

R e i a < だって私が迂闊にピアスを渡さなかったら こんな事にならなかったのに

O r l i < 誰だつてまさかマースさんがそんな事考えてるなんて思わないよ

それに虹のピアスはまた作ればいいんだし^^

R e i a < 怒らないの？

O r l i < 怒らないよ^^

R e i a < でも あのピアス作るのに時間かかったんでしょ？

O r l i < そうだけど 俺的にはレイアが俺とのペアリングを

捨てないでくれた事の方が嬉しいから^^

R e i a < ありがとう オーリー

O r l i < だから レイアももう気にしないでね？

俺がそう言ってもレイアはまだ気にしてるのかなかなか返事をしなかった。

O r l i < レイア ここ最近ずっとその事気にしてたからゲ
ームに入ってこなかったんだろ？

R e i a < うん

O r l i < じゃあ今日で気にするの終わり^^ もう解決し
たんだから

R e i a < うん ありがとう

O r l i < あ、そういえば 俺、レベル83になったよ^^

マースさんにはムカつくけど、いつものレイアに戻って欲しくて

俺は話題を変えた。

R e i a < え うそ！

O r l i < ホント（ー、）

R e i a < 追いつかれた>>

O r l i < 追いついちゃった(´ε、*(´>

R e i a < (↓ω↑)

O r l i < これでレベル上げも一緒にできるね^^

R e i a < うん(´、´)

顔文字使ってるって事は、元気出たかな——？

次の日、俺がゲームにログインするとシヨウさんが耳打ちしてきた。

「耳打ち」 Sho << オーリー ちょっといい？

「耳打ち」 Orli << うん

（何だろ？）

「耳打ち」 Sho << レイアから聞いた？

「耳打ち」 Orli << うん？

「耳打ち」 Sho << マースの事なんだけど あいつギルドから除名したから

（へ………？）

「耳打ち」 O r l i < < ショウさん レイアから聞いてたの？

「耳打ち」 S h o < < うん 実はつい最近、マースが前にいたギルドのマスターと偶然知り合ってたね

んで、マースがそのギルドをクビになった理由を聞いたんだ

「耳打ち」 O r l i < < マースさん 前のギルドもクビになっ
てんの？

「耳打ち」 S h o < < うん で、そのマスター曰く そのギルドの前にいたギルドも

クビになってんだってさ

「耳打ち」 O r l i < < マジで？

筋金入りの問題見たったのか。

「耳打ち」 S h o < < 全部今回と同じ様な事でクビになったらしい

「耳打ち」 O r l i < < 女の子絡みって事？

「耳打ち」 S h o < < そそ んで、最近レイアの様子がおかしかったし

マースが付き纏ってたみたいだから この間レイアがインした時に
それとなく聞いてみたんだ

（それでこの間、二人で鍵かけてチャットルームにいたのか……）

「耳打ち」 S h o < < オーリー レイアの事怒ってる？

「耳打ち」 O r l i < < 全然 むしろレイアが俺の事で悩ん
でたのが申し訳ないくらい；

「耳打ち」 S h o < < そか^^ それでさ マースの奴、レ
イアにピアス捨てたって言ってただろ？

「耳打ち」 O r l i < < うん

「耳打ち」 S h o < < でも 実はあいつ、オークションに出
品してたんだよ

「耳打ち」 O r l i < < マジで？

（どこまで性格悪いんだよ）

「耳打ち」 S h o < < まさかと思って この間、オークションで虹のピアス見てみたら履歴があつた

「耳打ち」 O r l i < < 最悪……

「耳打ち」 S h o < < んで、除名する前にあいつからピアスの代金取り返したから

今からオーリーのポストに送るよ

「耳打ち」 O r l i < < わぁ ありがとう

それからすぐにショウさんからお金が届いた。

「耳打ち」 O r l i < < えっ! ? こんなに? (。□。 ;

「耳打ち」 S h o < < 今 虹のピアス高いんだよ^^

「耳打ち」 O r l i < < なんで?

「耳打ち」 S h o < < w i k i に隠し効果で幸運アップって書いてあつたでしょ?

あれ、アイテムドロップ率がかなり上がるみたいよ^^

「耳打ち」 O r l i < < へえー だから高くなったのかな？

「耳打ち」 S h o < < そうみたい^^ それとマースに関してはこれ以上

レイアには関わらないように言っておいたし、実はレイアもマースに
ピアスを取られた時、GMに相談してみるつもりでマースとの会話を
スクリーンショットで保存しておいたらいいんだ。その後のチャット
ルームでの会話も全部

「耳打ち」 O r l i < < へえー レイアって意外としっかり
してるんだね

「耳打ち」 S h o < < うん 俺もそう思った^^ で、もし
またマースがレイアに何かしてきても

そのスクリーンショットを運営に証拠として提出すればアカウント
停止とかになるだろうから心配ないと思う

「耳打ち」 O r l i < < ショウさん いろいろ ありがとう
^^

「耳打ち」 S h o < < うん これにて一件落着（ー）b

さて……突然降って湧いたこの大金。

(どうしよう?)

これで『虹のピアス』を買い戻してレイアに再びプレゼント？

いや、それよりも……

「耳打ち」 R a i a < < オーリー居る？

お金の使い道を考えていると今度はレイアが耳打ちしてきた。

「耳打ち」 O r l i < < いるよ^^

「耳打ち」 R a i a < < よかったー 今からダレス鉱山に探掘に行きたいんだけど

一緒に行ってくれないかな？

『ダレス鉱山』は金鉱、白金鉱なんかの高めの鉱石が採掘できる場所だ。

たまにダイアの原石も採れる。

しかし、そこへ行くにはレベル90以上のモンスターがうじゃうじゃいる

ジャングルを通らなくちゃいけない。

まだレベル83の俺やライアは二人以上じゃないと行けない場所だ。

「耳打ち」 Orli << うん 行く行く^^

ここでライアから鉱山へ素材集めのお誘いがあったという事は

きつともう一度、一から作ってレイアに『虹のピアス』を

プレゼントしろって事なんだろう。

「後でまたゴブリン、シバきに行こつと」

- 22 -

マースさんの事が全て解決した数日後、

ゲームにログインするとポストにアイテムが届いていると

メッセージログが出た。

（何かな？）

ポストを開けてみるとプレゼントボックスのアイコンで

送り主はジュエリーショップからだった。

「????」

（ジュエリーショップ？ 私、何もオーダーしてないけどなあ？）

一緒に届いたジュエリーショップからのメッセージには……

- - - - -

R e i a 様へ

O r l i 様より、プレゼントをお預かり致しました。

お受け取り下さい。

- - - - -

(オーリーからプレゼント?)

私はポストからプレゼントを受け取り、

プレゼントボックスを開けてみると

中から『虹のピアス』が出てきた。

「うそ……」

そして、その『虹のピアス』には“Orlito Reia”と
刻印が入っていた。

このゲームの中では自分が持っているアイテムに

刻印を入れることが出来る。

町の中にあるジュエリーショップにそのアイテムを持って行き、

手数料を払えば指定した通りに刻印を入れてくれる。

ジュエリーショップを通して相手のポストに届くのは、

刻印すると他のプレイヤーに渡すことが出来なくなるからだ。

私はすぐにお礼が言いたくてオーリーに耳打ちをした。

「耳打ち」 Reia << オーリー 今どこ？

（オーリーに会いたい……っ）

「耳打ち」 O r l i < < サインスのオークションにいるよ^^

すると、オーリーからすぐに返事が来た。

どうやら同じ町にいるみたいだ。

『冒険者ハウス』を出て、オークションに行くと、

オーリーの目の前には私と同じフェイスタイプの

キャラクターがいた。

髪型も一緒、髪色は微妙に違うけど……

（しかも……名前が“ R a i a ”ってっ！？ 私と思いつきりかぶ
ってるしっ！？）

装備も私と同じくらいのレベルなのか、ほとんど同じみたいだ。

まさか……

（オーリー、私と間違えてるなんてコトないよね……？）

[Guild] Orli << あ レイアみつけ^^

すると、オーリーは私がいる事に気が付いて、
エモーションで手を振っていた。

（なんだ……間違えてたワケじゃなかったんだ？）

Reia << こんばんは（´、`）

私が手を振り返すとオーリーが近づいてきた。

その後ろからは私と同じキャラのRaiaさんも付いて来ている。

（オーリーのフレンドなのかな？）

Orli << 今からライアとレベル上げに行くんだけど
レアも行かない？

後ろにいる私と同じキャラの子はやっぱりオーリーのフレンドだった。

ギルドメンバーの一覧を見るとオーリーは

どうやらパーティーを組んでいるみたいだ。

「はあー……まだー……」

最近、ゲームにログインするといつもオーリーはパーティーを組んでいた。

多分、このライアさんだ。

Reia
くく
うん
でも、私も行ってもいいの？

（お邪魔じゃないかな？）

Orli << 全然ok^^

R a i a << 一緒に行きましょう^^

ライアさんにもそう言われ、断る雰囲気じゃなくなつた私は

一緒に行く事になった。

「Party」
R a i a
< <
よろしくね ^ ^

「Party Reia << こちらこそ よろしくね」

「Party」 Orli << レイアも俺達と同じ高校一年生
なんだよ^^

「Party」 Raia << そうなんだ^^

「Party」 Orli << なんか こうして並んでるとレ
イアとライアって双子みたい^^

「Party」 Raia << うんうん^^

(オーリーとライアさん、仲が良さそう……。

やっぱり私、お邪魔じゃないかなあ……？)

そう思っていると、微妙な空気を察したのか、

「Party」 Raia << えーと……あのさ、なんか変な
誤解されるのも嫌だから

カミングアウトしちゃうけど

ライアさんが話を切り出した。

「Party」 Raia << 俺、中身男だから^^

「えっ!？」

「Party」 Orli << (。□。;

オーリーもびっくりしているという事は知らなかったんだ？

「Party」 Orli << マジで？(。□。;

「Party」 Raia << マジ^^;

「Party」 Orli << ネカマ……(。□。;

「Party」 Raia << うん いやー、なんかレイアちやんが俺とオーリーの仲を

誤解して気まずい思いをしてたら悪いなーと思って;

(う……確かに誤解してました)

「Party」 Orli << てか、なんでネカマ？^^；

「Party」 Raia << キャラ作る時になんか女の子キ
ヤラでやってみたくなつて^^

で、ギルドメンバーの前では普段の口調で“俺”とか言ってたんだ
けど、

初めて会った人とかはそれだと引いちゃって；

「Party」 Orli << まあ確かにそのキャラでいきなり
男口調でしゃべられたら引くわな？^^；

「Party」 Raia << そそ だから女の子のフリして
て、オーリーにもそろそろ正体を

バラそうと思ってたんだけどね； という訳だから レイアちゃん、
安心してね？^^

……て、そう言われてもなんて返事をしていいやら。

「Party」 Reia < < , , (

これが精一杯の返事。

だって、“うん”と答えてしまうと私がオーリーの事を

好きなのがバレバレな気がしたから。

そして、私は『虹のピアス』のお礼を言うタイミングをすっかり逃し、

ようやく話を切り出したのはお互いログアウトする直前だった。

「お？」

放課後、帰宅しようとして昇降口に行くと、うちのクラスの下駄箱の前に

拾い上げてみるとピンクの小さなうさぎのストラップが付いていた。

⋮
 ♪)
 ♪
 ♪
)
 ♪
)
 ♪ |
 |

「わっ！？」

しばし眺めていると突然携帯が鳴り始めた。
ちよっとびっくり。

（俺が出たらマズいよなあー？）

そのまま出ずにいるとしばらくして留守電に切り替わったのか
携帯が鳴り止んだ。

うーん……これは、職員室に届けたほうがいいんだろうか？
それとも、モバイルショップ？

いや、学校の中で拾ったんだからやっぱり職員室？

……♪♪♪♪♪……、

どっちに持って行こうか悩んでいると、また携帯が鳴った。

（もしかして落とし主が鳴らしているのかな？）

勝手に電話に出るのもどうかと思ったけれど、

もしも落とし主だったらきつと困っていると思い、

俺は通話ボタンを押した。

「……………もしもし?」

『……………あのー、その携帯……………』

相手は女の子だった。

「あ、えっと……………もしかして、この携帯落とした人?」

『はい……………て、正確には私じゃなくて友達なんですけど……………』

「ならよかった。今、携帯拾ってショップに届けようか、職員室に届けようか悩んでたところだったんだ」

『そうですか、拾ってくれてありがとうございます。』

今、どこにいますか?』

「昇降口」

『じゃあ、正門で待っていてくれませんか?』

「うん、いいけど、もう学校から離れた所まで帰ってるなら

駅前かどこかで待ち合わせでもいいよ? そっちは今どこ?」

『駅前のファーストフードです』

「じゃ、俺がそこに行くよ。どこに座ってるか教えてくれる?」

『はい、えーと、2階の窓際の席にいます。』

女の子三人でいますので』

「OK、じゃあすぐ行くから」

終了ボタンを押して携帯を閉じようとした瞬間、

「んっ!?!」

俺は携帯の待受画面を見て驚いた。

(この画像……)

それは俺がやっているあのオンラインゲームの

スクリーンショットを待受用に加工した画像だった。

そして、そのスクリーンショットは

ハロウィンのイベントの時にレイアと二人で撮った

あのツーショットだった。

それぞれのキャラクターの上に“Orli”、“Reia”と

キャラ名と俺とレイアが入っているギルド名が

表示されているから間違いない。

このスクリーンショットを持っているのは

俺とレイアしかないはず。

……て事は、この携帯の持ち主はレイア？

しかも、この携帯がここに落ちていたという事は、

レイアってこの学校に通ってる子だったのか？

だとしたら……

俺は緊張しながら足早に駅に向かった――。

駅に近づくにつれ、俺の心臓がバクバクと早鐘を打ち始めた。

ファーストフード店に着いて、入口の前で

2階の窓際の席を見上げようとして、やっぱりやめた。

（ホントにレイアなのかな？）

俺は自動ドアの前で深呼吸をし、思い切って店の中に突入した。

ざわついている店内を通り過ぎ、2階への階段を一步一步上がって行くと、

徐々に2階にいる人達の話し声が聞こえてきた。

（窓際……窓際……）

そして、俺が窓際の席に座っている人達に視線を向けると、
カップルが一组と二人組の女の子がいた。

(……ん?)

その二人組は成瀬さんと杉田さんだった。

(あれ?)

(てか、三人組の女の子なんて居ないじゃん。

席移動したのかな?)

そう思いながらキョロキョロと周りを見回していると、

「あれ? 竹之内くん?」

と、後ろから声を掛けられた。

「竹之内くんも待ち合わせ?」

俺に声を掛けたのは同じクラスの徳永さんだった。

「あ……うん、ちょっと……」

あのさ、三人組の女の子が2階の窓際の席に

いたはずんだけど知らない?」

「窓際に座ってた三人組の女の子って……」

あ、もしかして……」

思い当たる事があるのか徳永さんはハツとして、

「沙耶の携帯拾ってくれたのって、竹之内くん?」

と、言った。

(え?)

「それってー……これ？」

俺はカバンからあの白い携帯を出して見せた。

「そうっ！　これこれっ！」

徳永さんはそう言つと、俺の手を引き

成瀬さんと杉田さんが座っている席に連れて行つた。

(……で、事はー、成瀬さんがレイア？)

「あのさ……成瀬さん、その待受に写ってるキャラってー……
もしかして、成瀬さんのキャラクター？」

俺は携帯を成瀬さんに返した後、思い切って聞いてみた。

「あ、うん……」

成瀬さんは少し恥ずかしそうに俯きながら頷いた。

（やっぱり……成瀬さんがレイアだったんだ……）

「竹之内くん、このゲーム知ってるの？」

すると、俺の隣に座っている杉田さんが

ポテトを摘みながら言った。

「うん、まあ……」

（つーか、成瀬さんの携帯の画面に写ってる“Orii”で、

俺なんだけどな）

でも、いざレイアを目の前になると

「実は俺がオーリーなんだ」とは言い辛い。

「竹之内くんも、このゲームやってるの？」

そして今度は俺の目の前に座っているレイア……

もといもとい、成瀬さんが少し上目遣いで言った。

その視線に俺は思わずドキッとし、

やっと治まった心臓がまた早鐘を打ち始めた。

俺はそれを誤魔化す為にやや慌ててストローを銜え、

コーラを飲みながらコクコクと頷いた。

（成瀬さんよ……そんな瞳で見つめるのは反則だよぉ）

「じゃあ、ゲームの中で遭った事あるんじゃない？」

「うんうん、世間は狭いって言うしねー」

杉田さんと徳永さんは冗談っぽく笑いながら言った。

（いや……“遭った事ある”ぐらいどころか、

同じギルドなんだけどなー）

「あはははははは……どーかなあー？」

俺は今、間違いなく顔が引き攣っているに違いない。

そして……

徳永さんが核心に触れた。

「ねえ、竹之内くんのキャラクター名って何？」

「ねえ、竹之内くんのキャラクター名って何？」

私が竹之内くんにキャラクター名を聞いてみようか

どうしようか迷っていると、香ちゃんが先に聞いた。

…… R R R、 R R R、 R R R、 R R R……、

「……あ、ちょっと、ごめん」

すると、竹之内くんが口を開きかけたところで携帯が鳴った。

「もしもし？」

竹之内くんは席を立ちながら電話に出ると

「え？ 今、どこにいるんだよ？」

周りをキョロキョロし始めた。

「あつ！ そんなトコで何やってんだよ？」

そして、窓の外に視線を移した。

私達も竹之内くんの視線の先に目を向けると

向かいの喫茶店の二階の窓際の席に綺麗な女の人がいた。

竹之内くんと同じ様に携帯で話しながら手を振って笑っている。

どうやら竹之内くんが今、電話で話している相手のようだ。

「いや……クラスメイトだから……」

少し照れたように竹之内くんはその女の人から目を逸らした。

多分、私達の事を聞かれたのだろう。

「はいはい……じゃーな」

竹之内くんは少し素っ気無く電話を切るとイスに座り直した。

「あの女の人、誰？」

すると、香ちゃんがすぐに質問した。

「あー、母親」

「えー、竹之内くんのお母さんっ？」

「若ーいつ」

「きれーい！」

真沙美ちゃんと香ちゃんの言う通り、竹之内くんのお母さんはとても綺麗な人だった。

私達三人が視線を向けるとにこっと笑って会釈をしてくれた。

「まさか、こんなトコにいるとは思わなかった……」

竹之内くんは頬杖をついて、窓の外とは逆の方向に向くとボソリと呟いた。

「なんでいるの？」

「んー、なんか仕事の相手と待ち合わせしてんだってさ」

「お仕事何やってるの？」

「ネイルサロンとエステサロン」

真沙美ちゃんと香ちゃんが交互に質問し、竹之内くんは頬杖をついたまま答えた。

「へえー、だからあんなに綺麗なんだー」

真沙美ちゃんがそう言うのと竹之内くんは

「えー！？　綺麗？　あれが？」

と、眉間に皺を寄せた。

「竹之内くんは毎日見てるから、そう思っのよ」

その顔を見た香ちゃんは、ププツと笑った。

「顔見たの3日ぶりぐらいだけど？」

さつき電話掛けて来た時も“久しぶりー♪”

とか言ってたし。

息子に向かって“久しぶり”って……」

（竹之内くんのお母さんて、そんなに忙しい人なんだ……？）

なんとなく向かいの喫茶店に視線を移すと、いつの間にか

竹之内くんのお母さんの向かい側にはスーツを着た女性が座っていた。

きつとお仕事の相手が来たんだろう。

書類を見ながら話をしている。

まさに“ビジネスウーマン”

一時間後、竹之内くんと私達と一緒にお店から出ると、

「あらあ、慧」

ちょうど向かいの喫茶店から竹之内くんのお母さんも出てきたところだった。

竹之内くんはその声に振り返ると「げ」と小さな声で言った。

「こんにちは」

竹之内くんのお母さんは私達が挨拶をすると、

「こんにちは」と、優しく笑いかけてくれた。

「ちょうどよかった。慧、一緒に帰ろう」

竹之内くんのお母さんはそう言うと鞆を竹之内くんに渡した。

「重っ」

鞆を持たされた竹之内くんは口を尖らせながら何が入ってるんだ？と、言った顔をした。

「仕事、もう終わったの？」

「うん、今日はもうこのまま帰るってお店には言ってるから」

「ふーん、珍しい」

そして竹之内くんは私達に「じゃ、また明日学校で」と、

軽く手をあげてお母さんと一緒に駅に向かって歩き始めた。

「竹之内くんて、優しいね」

「なんだかんだ言っつて、ちゃんとお母さんの鞆持っつてあげてるし」

竹之内くんと竹之内くんのお母さんの後姿を見送りながら真沙美ちゃんと言った。

私は、もつずっと前から知っていたよ。

竹之内くんが優しい人だっていう事を……。

私が彼を最初に見かけたのは今の高校の試験日だった――。

ほとんどの受験生がすでに試験会場に入り、教科書やノートで復習していたり、

集中しようと目を閉じている時、

「あ……」

彼の隣に座った男の子がカバンの中を手で探りながら慌て始めた。
どうやら筆記用具を忘れたらしい。

「これ、使って?」

すると、彼は自分のペンケースから鉛筆3本と消しゴムを出して

その男の子に貸してあげた。

「え……いいの？」

「うん、俺、余分に持って来てるから」

彼は大丈夫という風にその男の子に笑って見せた。

周りにはみんな自分の事で精一杯で、

“他人に気なんて使っている余裕はない”

と言った感じで知らんフリしてるのに。

優しい人……。

彼の二つ後ろの席に座っていた私はその様子を見て彼の事がとても印象に残った。

そして入学式の日――。

教室に入り、中を見回していると私の視界に彼の姿が映った。

（あ……、あの人……）

その後、初めてのHRで自己紹介があって彼の名前を知った。

“ 竹之内慧 ” くん。

私はその日から彼の姿を目で追うようになった――。

（成瀬さんがレイアだったとは……）

その夜、ゲームにログインしたものの、俺は少々……かなり戸惑っていた。

レイアの正体を知ってしまった以上、これから先、普通に話せる自信がない。

てか、“自分がオーリーだ”と俺も正直に言うべきなんだろうか？

でもなー……

そもそもどうやって話を切り出せばいいかわからない。

……で、その日は結局何もしないままゲームからログアウトしたー
ー。

翌朝、駅の改札を出たところで

「竹之内くんっ」

と、誰かに呼び止められた。

「ん？ あれ？ 成瀬さん、おはよう」

呼び止めたのは成瀬さんだった。

「お、おはよう」

成瀬さんは俺の目の前にくると少しだけ顔を赤くした。

（なんか……そんな赤くなれるとこっちまで照れるんだけど……）

「あ、あの……これ、昨日のお礼」

そして、成瀬さんが俺に何かを差し出した。

（昨日のお礼？）

不思議に思いながら、とりあえず受け取ると、

「携帯拾ってくれたお礼」

と、言った。

「え……それなら昨日、セット奢ってくれたじゃん？」

成瀬さんは昨日ファーストフード店でもお礼にと言ってセットを奢ってくれた。

「う、うん……でも、ちゃんとお礼がしたかったから」

「そっか、じゃあー、ありがたく」

差し出された袋を俺が受け取ると、成瀬さんは嬉しそうに笑った。
だってせっかくこうして俺を待っていてくれた訳だし。

それから俺と成瀬さんは一緒に学校に向かって歩き始めた。

「竹之内くんていつからあのゲームやってるの？」

「夏休みの前くらいだよ。成瀬さんは？」

「私は高校に入ってから」

「へえー」

「今、レベルいくつ？」

「83」

「じゃあ、私と一緒にだ」

（知ってる）

「どこのサーバー？」

このゲームはわりとたくさんの人がやっている。

だからサーバーの数もそれなりにあるワケで、

だいたい一つのサーバーに3、000人くらいがプレイしている。

違うサーバーの場合、チャットルームで話は出来るけど

それぞれのキャラクターに対しては耳打ちも出来ないし、

ゲーム内で会う事は出来ないのだ。

で、ここで俺がサーバーの名前を答えてしまつと……

『あら、私と同じサーバーね』

←

『じゃあ、やっぱり会った事あるのかもー』

←

『レベルも同じだしー』

←

『竹之内くんのキャラクター名ってなあに？』

……と、まあこんな感じの会話になるわなー。

でもって俺がオーリーだという事がバレちゃう……と。

別にバレてもいいんだけどバレてしまうと

今までみたいにレイアが俺に話しかけてくれなくなる気がした。

そんなのは嫌だ。

「どこだったっけかな……？ 適当にサーバー選んだから忘れた」

俺はレイアに今まで通り話して欲しかった。

だから、そう言って誤魔化した後、俺も成瀬さんがレイアだって事を

意識しない事にした。

数日後、期末テストが終わった日の夜――。

「Party」 Raia << そういえば、今日、学校の図書室で面白い本みつけたよ^^

「Party」 Orli << へー どんな本？

「Party」 Raia << ギリシャ神話の本なんだけどこの間三人でやったクエがあるじゃん？

あのクエってなんか ギリシャ神話が元ネタみたいよ それが載ってた

「Party」 Orli << へー

「Party」 Raia << 昨日ギルドメンバーが言ってたんだけど他にもギリシャ神話が元ネタになってる

クエとかミッションがあるみたいだよ^^

「Party」 Reia << 知っててやるのも またおもしろいかもね（、）

「Party」 Raia << うんうん^^ ところでオーリー

「Party」 Orli << ん？

「Party」 Raia << 俺と結婚して？

久しぶりに私とオーリーとライアさんの三人でパーティを組み、遊びながらレベル上げをしていると突然ライアさんがオーリーに
“プロポーズ”した。

「えっ！？」

私は思わず飲んでいたココアを吹き出した。

慌てて零れたココアをティッシュで拭きながら

パソコンのモニターを見ているとオーリーも驚いているのか

しばらく反応がなかった。

「Party」 Orli << コラ、いきなり何言い出すんだ
よ びっくりしてコーヒー吹いたじゃん^^；

「あはは、オーリーも吹いちゃったんだ」

オーリーの顔は知らないけれど、パソコンの前で

コーヒーを吹いている姿を想像したら可笑しくて笑ってしまった。

「Party」 Raia << ダメ？

「Party」 Orli << ダメってライア、中身男じゃん
^^;

「Party」 Raia << でも俺、キャラは女の子だし
問題なし（ー、ー）

「Party」 Orli << いや 俺の気持ち的に大アリだ
から；

「Party」 Raia << ちえー やっぱ ダメかぁー

「Party」 Orli << つーか、ライアが変な事言い出
すから すっかりレイアが

ドン引きしちゃってるだろ；

黙って二人の会話をロムっていたから、オーリーは私がドン引きしていると思ったらしい。

「Party」 Reia << あはは 大丈夫。びっくりはしたけど引いてないよ（´、`）

でも、ライアさん なんで結婚したいの？

「Party」 Raia << ーとね、結婚したら結婚指輪が貰えるから

「Party」 Orli << あー、確か全部のステータスが+50になる神装備だっけ？

「Party」 Raia << そそ それそれ^^ で、ダメ元でさり気なく言ったら、

もしかして結婚してくれるかなー？って思ったんだけど

「Party」 Orli << てか、結婚は課金サービスだろ？

オーリーの言うとおり、このゲームの中でキャラクター同士が

“結婚”する場合、課金しなくてはならない。

公式サイトアイテムショップに売っている『ウェディングパック』。

結婚式、結婚指輪、ウェディングドレス、タキシード、

そして新婚旅行が全部入ったアイテムボックスだ。

「Party」 Raia << 課金するだけの価値はあるよ？

「Party」 Orli << まあ、結婚式とかはともかく指輪だけでも魅力だな

「Party」 Raia << だろ？ だから結婚しようぜ^^

「Party」 Orli << やだ^^；

「Party」 Raia << 結婚指輪してればお互い離れた所にいても召喚できるんだよ？

「Party」 Orli << 何それ？

「Party」 Raia << 例えば俺がサースの町にいて、オーリーが白珊瑚海岸にいたとする

「Party」 Orli << うんうん

「Party」 Raia << で、オーリーが俺に会いたいなあーって時には 白珊瑚海岸に俺を

呼ぶことができるワケ　その逆も然りね

「Party」　Orli　<<　へえー

「Party」　Reia　<<　すごい

「Party」　Raia　<<　だろ？　だから結婚しようぜ^^

「Party」　Orli　<<　やだって^^；

「Party」　Raia　<<　ちえー（、3、）

「Party」　Orli　<<　同じ結婚するなら　俺はレイア
としたい（*、D、*）

（え？）

まさかオーリーがそんな事を言うなんて思わなかったから
かなりびっくりした。

私はまたココアを吹き出しそうになった。

「Party」 Raia << オーリー レイアちゃん引いて
るよ? (m)

「Party」 Reia << 引いてないよー (、) び
っくりしたけど

ホントはちょっと引いている……というより、びっくりして
反応にやや困ったのは確かだけど。

「Party」 Orli << じゃあ 俺と結婚する? ^^

「Party」 Raia << するするう ^^

「Party」 Orli << ライアに言ってねえっ (、) ㇏
()

「Party」 Raia << ちえー (、 3)

ホントは、オーリーとなら結婚したいと思った。

でも、私は竹之内くんの事もすごく気になっていた。

別にゲームの中の事なんだから竹之内くんの事とは
関係は無いと言われればそうなんだけれど。

竹之内くんの事が好き……でも、オーリーの事も好き。

（竹之内くんがオーリーだったらいいのに……）

そんな奇跡に近い事なんて、絶対あるはずがないと思いながら、

竹之内くんのキャラクターの名前も、どこのサーバーかも

わからないから、ついそんな事を考えてしまう。

——翌日、昼休憩。

昨夜、ライアさんが言っていたギリシャ神話の本を探しに私は図書室に向かった。

図書室のドアを開けると中はとても静かで、

隣接しているPC室、自習室からも物音一つして来ない。

どこか別空間のような錯覚を覚えた。

そして、ギリシャ神話が載っていそうな本を探しながら

奥へ奥へと進んでいくと、一番奥の本棚の前に

竹之内くんが立っていた。

「あ……」

竹之内くんは私に気がつくとき少し驚いた顔をした。

「……………」

まさか竹之内くんがいるとは思わなかった。

「何の本探してるの?」

「え、と…………ギリシャ神話が載ってる本」

私がそう答えると竹之内くんは、

「あー、それなら、この辺にあるよ」

少し高い位置にある本を指差した。

（た、高い…………）

しかし、その本は私が背伸びしても凡そ手が届かないであろう位置

にある。

すると、竹之内くんは私の頭上からひょいと手を伸ばし、

「この本でいい？」と三冊程取ってくれた。

「あ、ありがとう」

私がお礼を言うと竹之内くんは無言で小さく笑った。

そして、閲覧コーナーに移動しようとした時、足元が大きく揺れた。

一瞬、眩暈がしたのかと思っていると「レイアッ！」と、

竹ノ内くんと呼ばれ、抱き寄せられた。

（え……？ 竹之内くん……今、“レイア”って……）

訳がわからず、何が起こったのか確認しようと顔をあげると、

「危ないから、顔伏せてて」

と竹之内くんと言われ、本棚から落ちてくる本が

床に散乱したのが視界に入り、地震が起きているんだと把握できた。

竹之内くんは私を守るようにしっかりと抱きしめていてくれた。

地震は数十秒続き、その間、私の頭を庇っている竹之内くんの

左の手の甲に本が直撃したのを感じた。

竹之内くんが庇ってくれなかったら私の頭に直撃していただろう。

「あー、びつくりしたー」

地震が治まると竹之内くんは「大丈夫？」と言いながら私から腕を離した。

「う、うん……竹之内くんは？ 手、大丈夫？」

本が当たった感覚は結構な衝撃があった。

恐らく高い所の本棚から落ちてきた本が当たったのだろう。

「平気、平気」

それでも竹之内くんは私に心配かけまいと笑っていた。

しかし、私が「ちょっと見せて？」と竹之内くんの左手を取ると、
少しだけ痛そうな顔をした。

「大丈夫じゃなさそう」

「平気だよ。ちょっと本が当たっただけだから」

「駄目よ、保健室行こう？」

私が少し強引に言うと、竹之内くんは戸惑いながら「……うん」と返事をした。

「……よかった、たいした事なくて」

竹之内くんの怪我は幸い、たいした事はなかった。

本の角が当たった気がしたからちょっと心配していたけど

軽い打撲で全治3日と言われた。

「ごめんね、心配かけて」

苦笑いしながら竹之内くんが言った。

（謝らなきゃいけないのは私の方なのに……）

「私の方こそ、ごめんね」

「なんで、成瀬さんが謝ってんの？」

「だって、私を庇って怪我しちゃったから……」

「こんなの怪我の内に入らないよ。それに……」

俺、成瀬さん怒ってるかと思ってた」

「どうして？」

「いやー、状況的に仕方がなかったとは言え、

強引にそのー……抱きしめちゃったって言うか……」

竹之内くんはそう言つと顔を赤くした。

「お、怒ってないよ……」

そう答えながら私は抱きしめられた時の事を思い出していた。

（そういえば……竹之内くん、私の事“レイア”って……）

「ねえ、竹之内くん」

「うん？」

「さっき私の事“レイア”って呼ばなかった？」

「えっ、あー、えーと……」

「竹之内くん、ゲームの中で私と会った事あるの？」

「……」

（なんで黙っちゃうの？）

「もしかして……」

「もしかして……」

（オーリー？）

私は直感的にオーリーじゃないかと思った。

「……」

でも、聞けない。

「……」

「……」

そしてお互い黙ったまま無言で保健室から出ると

「あー、いたいた、竹之内っ」

隣のクラスの松井くんが駆け寄って来た。

「おう、なんだよ？」

竹之内くんは松井くんの方を振り返るとそのまま一緒に

教室に向かって歩き始めた。

私もその後をついて歩く。

「おまえ、今日の夜、暇？」

「いや、暇じゃない」

「えー、マジで？ 合コンあるんだけど来れない？」

「無理。今日は約束があるから」

「ま、まさか……デート？」

「え、べ、別にそーゆーワケじゃー……」

「でも、女の子絡みだろ？」

「……」

「竹之内、ひょっとして彼女出来た？」

女の子絡みか？ と聞かれ、何も答えない竹之内くんに

松井くんはにやにやしながら言った。

「え？」

松井くんのストレートな質問に竹ノ内くんは言葉を詰まらせていると、

そこでちょうど予鈴が鳴った。

「あ、じゃーな。今度、彼女の写メ見せろよー？」

松井くんはそう言つと自分の教室に戻っていった。

「……」

竹之内は無言で手を軽く挙げ、見送っていた。

(……竹之内くん、彼女いるんだ?)

——その日の夜。

私はオーリーと待ち合わせをしていた。

今日から始まるクリスマスのイベントクエストと一緒にやろうと昨夜約束したのだ。

クリスマスイベントの内容は今回も男女ペアのカップルクエストとソロクエストの二種類。

カップルクエストの方の報酬は白いサンタ衣装。

ソロクエストは『冒険者ハウス』と呼ばれているキャラクターそれぞれの

部屋に飾ることができるツリーとその飾り。

5種類ある飾りをツリーにつけてその飾りの組み合わせによって

戦闘時の経験値アップとか敗北時のデスペナルティー軽減、

アイテムドロップ率アップ、合成成功率アップなどいろいろと効果があるのだとか。

（オーリー、来るかな？）

“無理。今日は約束があるから”

竹之内くんがオーリーならきつとゲームにはログインして来ない。

だって彼女とデートって言ってたから。

しかし……

「Guild」 Orli << こんばんはー

約束の時間を5分程過ぎた頃、オーリーがログインした。

（オーリーじゃなかった……）

「はあ……そりゃそうよねー」

私はパソコンの前で溜め息をついた。

「耳打ち」 Orli << お待たせ、wikiでいろいろ調べてたら遅くなった ごめんね；

「耳打ち」 Reia << そんなに気にしなくていいのにー（、）

（よかった……あの時、竹之内くんに「もしかして、オーリー？」

なんて言わなくて……)

「Party」 Orli << 先にカップルクエの方だろうか
^^

「Party」 Reia << うん(、、)

今回のカップルクエストは伝説のサンタクロースがどこかで落としてしまった

最後のプレゼントを二人で捜してくるというもの。

まず、私が伝説のサンタクロースからどのあたりでプレゼントを落としたのかを聞き出し、

オーリーがその地点へ行ってプレゼントを拾ってくる。

今度はそのプレゼントを誰に渡すのかを私がまた伝説のサンタクロースから聞き出し、

オーリーが渡しに行って帰ってくればクエストクリアだ。

私とオーリーはあっさりとクエストをクリアした。

「Party」 Orli << サンタ服げつと！ さっそく生
着替え^^

「Party」 Reia << うん（、、）

私とオーリーは白いサンタ服に着替えた。

女の子はミニスカートのワンピース。

男の子はハーフパンツ。

後は大きなふわふわのボンボンが付いた帽子と白い手袋とブーツが
セットだ。

「Party」 Reia << きゃーっ スカートの丈短すぎ
ー><;

「Party」 Orli << 大丈夫、大丈夫 そのくらいの
丈なら うちの学校にもそのへんにいるよ？^^

「Party」 Reia << そうだけどー；

「Party」 Orli << スクリーンショット撮ろー

「Party」 Reia << うん；

なんかオーリーはやけに上機嫌だけど私はスカートの丈が気になっていた。

確かにオーリーの言うとおり、うちの学校にもこのくらいのスカート丈の子はいる。

ただ、私はここまで短くはないけれど。

“ここまで”……というのは見た感じ膝上25cmくらい。

ホントに穿いている訳じゃないから、まあ……別にいいんだけど。

スクリーンショットでハロウィンのイベントの時のようにツーショットを撮った後、

時間的に余裕があったからソロのクエストもやろっという事になった。

「Party」 Orli << 今日はライア来ないのかな？
ソロのクエ三人でやろうと思ってただけだなー

ソロのクエストの方はイベント用のモンスターを狩ってドロップするアイテムを集める。

アイテムを集めるのはそんなに大変ではないけれどいつも一緒に遊んでいるから

声を掛けようと思ったのだろう。

「Party」 Orli << 先に二人で狩ってようか^^

「Party」 Reia << うん（´、´）

……で、結局ライアさんが来たのは午後11時過ぎだった。

私とオーリーがそろそろ落ちようと町に戻るとオークションの前に立っていた。

O r l i < < ライア 今、来たの？

R a i a < < うん、アイテム整理だけして寝ようと思って）
'、（

O r l i < < そっか 今日からクリスマスイベント始まったから一緒にやろうと思ってただけど

なかなか来ないからどうしたのかと思った^^

R a i a < < えへへ 今日はデートしてたから（*´Д`*）

（デート……？）

確か、竹之内くんも今日はデートだって言っていた。

「まさかね……」

――翌日。

昨夜はライアがゲームにインしてくるのが遅かったから

今夜、改めてまた三人で集まってソロのクエストをやる事になった。

「Party」 Orli << そういえば、ライア

「Party」 Raia << うん？

「Party」 Orli << 彼女はこのゲームやってないの？

「Party」 Raia << うーん、やりたくても自分専用のパソコンがないから

できないんだよ

「Party」 Orli << そっかー、一緒に出来たらいいのにな？ そしたら

俺にわざわざ結婚してくれなんて言わなくてもいいし^^

「Party」 Raia << そうなんだよなー（´Д`）

オーリーは彼女いないの？

「Party」 Orli << いないよ^^

「Party」 Raia << レイアちゃんは？ 彼氏いるの？

「Party」 Reia << いないよー（、、）

（へえー、成瀬さん、彼氏いないんだ？）

ちよつと意外だった。

てゆーか、そもそもいたら毎晩ゲームにログインして来ないだろう。

ライアは時々ゲームにログインしない事もあるから、

彼女とデートとか電話でもしているんだろうけれど。

「Party」 Raia << じゃあ、オーリーとレイアちゃんマジで結婚すればいいのに

「Party」 Orli << 俺だけその気でも^^；

「Party」 Raia << レイアちゃん嫌なの？

「Party」 Reia << そんな事ないよ（、、）

（え……）

「Party」 Raia << じゃあ、思い切って結婚しちゃえー（、、）ノ

（成瀬さん、マジ？）

……いや、きつと社交辞令だな。

「Party」 Orli << そんな事言ったら、俺、本気にしちゃうよー？（*、旦那*）

「Party」 Raia << してしてーん♪（*、旦那*）

「Party」 Orli << ライアに言われてもなあー（、、）

A)

「Party」 Reia < < 、 、)

レイアはそれ以上の反応はしなかった。

そりゃそつだ。

こんな会話、あの成瀬さんがさらりと聞き流せるはずがない。

という訳で俺はちょっと無理矢理に話題変換してその場を誤魔化した――。

「なあ、大山」

「んあ？」

「俺、結婚しようと思ってるんだけど……」

「はあっ!？」

翌朝、いつものように俺の目の前でコーヒー牛乳を飲んでいる大山に言ってみた。

案の定、驚いている。

「け、け、けけけ、結婚って、おまえ……」

「て、言ってもゲームの中の話なんだけど」

「なんだよ、ゲームの話が脅かすなよ。」

んで？ それってもちろんレイアちゃんだよな？」

「うん」

「レイアちゃんにはもう話したのか？」

「話したって言うかー、話の流れでそんな雰囲気になったと言うか？」

「ふーん、じゃ、レイアちゃんもまんざらでもないんだ？」

「うーん、多分」

「多分で、おまえ……」

「それがよくわかんねえんだよなー」

「んー、確かああいうゲームって“結婚”はできても

“離婚”できない場合が多いからなー。

おまえが本気でその“結婚”を考えてるなら、

レイアちゃんの気持ちを確かめてみたら？

いくらゲームって言ったって相手が嫌がってたら

楽しくなくなるしな」

「だよなー……」

溜め息をつきながら頬杖をつく、大山の肩越しに成瀬さんが見えた。

（相変わらず可愛いなー）

しかし、いざ“結婚”となると俺だけ相手の正体を知っているというのは

どうなんだろう？

レイアはオーリーの正体を知らない。

でも、俺はレイアの正体を知っている。

なんか、それってズルい気もするけれど……。

「竹之内くん、今日は湿布貼ってないんだね」

朝、HRの前に教室で話していると真沙美ちゃんが

竹之内くんの方に視線を向けた。

「あー、ホントだ。でもまだ青痣が残ってるね」

そして香ちゃんも竹之内くんの方に視線を向けた。

私も竹之内くんの方に顔を向けると

確かに昨日まで湿布をしていた左手には何もなく、

手の甲に薄っすらと痣が残っていた。

（もう大丈夫なのかな？）

全治3日と聞いているけれど、それでもまだ少し心配だった。

私が竹之内くんをじっと見つめていると視線を感じたのか、

竹之内くんも私の方に視線を向け、思わず目が合った。

私はすぐに視線を外した。

竹之内くんとは最近、よく目が合う。

私が竹之内くんの姿を目で追っていると必ずと言っていいほど

竹之内くんが私をちらりと見る。

そして、お互い慌てて目を逸らす――。

――翌日。

今年最後の登校、終業式のこの日は私と竹之内くんが日直だった。

「左手、もう大丈夫？」

左手の痣はもうほとんど目立たなくなっていたけれど気になっていた私は

終業式が終わったHRの後、一緒に黒板を消している時に聞いてみた。

「……えっ？」

竹之内くんは何か考え事をしていたのか、反応するのに間があった。

「手……もう大丈夫かなー？　って……」

「あ、ごめん。うん、もう全然平気」

竹之内くんはそう言っていると左手を私に開いたり握ったりして見せた。

（よかった……）

「あのさ……」

そして、再び二人で黒板を消していると竹之内くんが

何か思い切ったように口を開いた。

「イブの夜、何か予定とかってある？」

私が視線を向けると竹ノ内くんは黒板を消しながら言った。

「うっん」

「じゃあ……24日、夜10時に『空中庭園』で待ってて」

「え？」

竹之内くんはそれだけ言うと黒板を消し終わって自分の席に戻った。

“『空中庭園』で待ってて”

それは一体どういう事なのか？

私はその意味がよくわからずにいた。

『空中庭園』とは、あのゲームの中で私とオーリーがイベントの後や、

二人でゆっくり話したい時によく一緒に行く場所だ。

竹之内くんがライアさんなら……いや、でも、

ライアさんとは『空中庭園』に行った事なんてないし……。

「た、竹之内くん」

私はどういう事なのか確かめようと自分の席で日直日誌を

書き始めた竹之内くんに声を掛けた。

「さっきのって……」

「ん？」

竹之内くんは日直日誌を書きながら少しだけ顔をあげた。

「あ、の……」

竹之内くんの前の席には大山くんもいた。

どうやら待っているみたいだ。

(いきなり、「ライアさんなの?」なんて言ったら変だと思われるよね?)

「え、と……」

「成瀬さん、黒板の日直の名前今のうちに書き換えなよ。」

慧、もうちよつとで日誌書き終わるから」

私が何て言おうか迷っていると大山くんに言われた。

「あ、うん……じゃあ、竹之内くんのも書き換えておくね」

日直の名前を書き換え終わるとちょうど竹之内くんも日誌を書き終わり、

パタンと日誌を閉じた後、私に視線を向けて「日誌は俺が先生に出しておくから」と、

席を立つと大山くんと一緒に帰って行った。

「あ……」

結局、聞けなかった――。

——24日。

この日は朝から雪が降っていた。

小さな白い妖精が空から舞い降りてくるように、

ふわふわふわふわ……

そして夕陽に照らされ、茜色に染まった一面の銀世界を窓から眺め、

私は竹之内くんの事を考えていた。

（竹之内くんのキャラクターで一体……？）

それに今日の夜、『空中庭園』で待ってるって——。

部屋の時計が21時45分を指しても、私はパソコンの電源さえも入れていなかった。

（22時に『空中庭園』にいるのが竹之内くんのキャラってコトよね……？）

21時50分。

（竹之内くん、実は私と同じサーバーだったのかな？）

サーバーが同じじゃないといくら『空中庭園』で待っていても会え

ない。

私はとりあえず、パソコンの電源を入れた。

21時55分。

（竹之内くんはもうログインしているのかな？）

デスクトップにあるゲームのショートカットアイコンをダブルクリック。

とりあえずゲームを起動した。

（もし……竹之内くんのキャラが本当にライアさんだったら……）

そう思うと、キャラクター選択画面の先へ進めない。

22時。

とうとう約束の時間になってしまった。

（竹之内くん……待ってるかな？）

レイアのキャラクターを選択し、思い切ってログインボタンをクリックした。

いつものローディング画面さえもとても長く感じる。

そして、町の中にレイアのキャラクターが現れ、

一番最初にレイアさんをサーチで搜した。

（いない……）

ライアさんはログインしていなかった。

（ライアさんが竹之内くんのキャラじゃないの？）

しかし、時間はまだ22時を過ぎたばかりだ。

少し遅れているだけなのかもしれない。

22時05分。

私は『空中庭園』に向かった。

（竹之内くん、来るかな？）

22時10分。

『空中庭園』まであと少し……心臓が早鐘を打ち始めた。

私は『空中庭園』の手前のエリア・『ユナ神殿』の最後の扉の前、
思わず立ち止まった。

この扉の向こうはもう『空中庭園』だ。

「……………」

パソコンのモニターの前、『空中庭園』に繋がる扉を見つめながら
進めずにいた。

22時15分。

もう一度、ライアさんをサーチしてみた。

しかし、やっぱりライアさんはログインしていなかった。

それに私が来てからここを通った人はいない。

『空中庭園』へはこの扉を通らないと行けないから

竹之内くんがライアさんだという線は消えた。

それなら竹之内くんのキャラクターは私が知らない全然別の

誰かでもう『空中庭園』で待っているのかもしれない。

(でも、前日にライアさんが『空中庭園』でログアウトしていたら
……)

考えていても埒が明かない。

私は、思い切って『空中庭園』への扉をクリックした。

ローディング画面になり、緊張でカラカラになった喉を
ココアで潤しながらパソコンのモニターを見つめていた。

そして、『空中庭園』に画面が切り替わるとそこには……

オーリーがいた――。

(オーリー……?)

『空中庭園』の中は窓の外と同様に雪が降っていた。

太陽の光にキラキラと美しく反射しながら私とオーリーを包み込むように……。

オーリーは私に気がつくともーションで手を振った。

「耳打ち」 Orli << よかった 来てくれた^^

「……」

(オーリーがこんな事言うのって……)

「耳打ち」 Reia << もしかして、竹之内くん？

まさか、そんなはずがないと思いながら思い切って聞いた。
すると……

「耳打ち」 Orii << うん

オーリーから返って来た返事は私の予想を見事に裏切り、
だけど、密かに期待していた事だった。

「耳打ち」 Orii << ごめん 今まで黙ってて

「……」

（オーリーだったんだ……）

「耳打ち」 O r l i < < なんか言い出せなくて。 怒ってる？

「耳打ち」 R e i a < < そんな事ないよ ただ、びっくりしちゃって

私、てつきりライアさんが竹之内くんだとばかり思ってたから；

「耳打ち」 O r l i < < そうなんだ；

「耳打ち」 R e i a < < いつから 私がレイアだって気付いてたの？

「耳打ち」 O r l i < < 成瀬さんの携帯拾った時

（あ、そうか……待受画面……）

確か竹之内くんが私の携帯を拾ってくれた時の待受画面は

ハロウインの時に撮ったオーリーとのツーショットだった。

今はこの間のクリスマスの時に撮ったツーショットだけれど。

「耳打ち」 O r l i < < それで今日、わざわざ呼び出したのはさ

「耳打ち」 R e i a < < うん

「耳打ち」 O r l i < < 結婚の事なんだけど

「えっ!?!」

「耳打ち」 O r l i < < 俺は本気だから

(“本気” って?)

「耳打ち」 O r l i < < 俺は本気でレイアと結婚したいって思ってる。

でも、俺はレイアの素性を知ってるけどレイアは俺の素性を知らなかっただろ?

「耳打ち」 R e i a < < うん

「耳打ち」 Orli << だから、なんかそれはフェアじゃないって言うか、

レイアにも俺の素性をバラした方がいいと思って

(それで今日、私を呼び出したんだ……)

「耳打ち」 Orli << もちろん結婚はゲームの中の話だし、レイアが乗り気じゃないなら

全然断ってくれていい。ただ、レイアが少しでも俺と結婚してもいいと思うってくれるなら

考えてくれないかなー？って

「……」

「耳打ち」 Orli << それともう一つ、これはゲームの中の話じゃなくてリアルでの事なんだけど

「？」

「耳打ち」 O r l i < < 俺と付き合っ
て欲しいんだ

「っ！？」

(これって……告白……？)

「耳打ち」 O r l i < < 彼女としてっ
て事ね

「耳打ち」 R e i a < < うん

「耳打ち」 O r l i < < 本当はちゃんと会っ
て言いたかった
んだけど結婚の話だけして

新学期まで待つてるのって出来なくて。返事はゆっ
くりでいいから

「耳打ち」 R e i a < < うん

「耳打ち」 O r l i < < 俺の話はそれだけ

「……」

「耳打ち」 O r l i < < それじゃ

「え？ あ……」

「耳打ち」 R e i a < < 待つて、オーリー

私はその場でログアウトしかけているオーリーを慌てて呼び止めた。

（あー、違う）

「耳打ち」 R e i a < < じゃなくて、竹之内くん

「耳打ち」 O r l i < < どちらでもいいよ^^

「耳打ち」 Reia << うん ごめん

(私も言わなきゃ……ちゃんと自分の気持ちを)

「耳打ち」 Reia << 結婚の話なんだけど

「耳打ち」 Orli << うん

「耳打ち」 Reia << 後、竹之内くんと付き合って話も

「耳打ち」 Orli << うん

でも……

いざ、言葉にしようと思ったらなんて伝えればいいかわからない。

「耳打ち」 Orli << もしかして、どっちも嫌？

どんな言葉で言えばちゃんと伝わるのか迷っていると、
しばらく待っていてもなかなか何も返してこない私に
竹之内くんは痺れを切らしたようだ。

「耳打ち」 Reia << ううん その逆

私は慌てて否定した。

「耳打ち」 Orii << ?

「耳打ち」 Reia << 逆って言うか、うまく言えないんだ
けど

「あーん、もうっ、なんて言ったらいいのかわかんないよーっ」
言葉に出来なくてそれがもどかしくて堪らない。

「耳打ち」 O r l i < < 逆って事はどっちもOKって受け取
っていいのかな？

「耳打ち」 R e i a < < うん

オーリーの言葉に素直に返事をした。

「耳打ち」 O r l i < < ホントに？

「耳打ち」 R e i a < < うん

だって……

それが私の本当の気持ちだから――。

「耳打ち」 O r l i < < よかった。どっちも嫌だって言われ
たらどうしようかと^^；

「耳打ち」 R e i a < < そんな事言わないよ；

「耳打ち」 O r l i < < ありがとう じゃあ、これからよろしくね。^^^ と言つよりこれからもかな？

「耳打ち」 R e i a < < こちらこそよろしくお願いします m
(_ _) m

「耳打ち」 O r l i < < ところで、メリークリスマス^^^

そつだ……

今夜はクリスマスイブだった。

「耳打ち」 R e i a < < メリークリスマス(_ _)

「耳打ち」 O r l i < < レイア、クリスマスプレゼントあげる^^^

オーリーはそつ言つと私にトレードを申し込んできた。

「？」

そして、私がトレードに应じるとクリスマスケーキをくれた。

「耳打ち」 Reia << ありがとう（、、）

「耳打ち」 Orli << 一緒に食べよう^^

「耳打ち」 Reia << うん（、、）

「耳打ち」 Orli << せーの

私とオーリーは一緒にクリスマスケーキを食べた。

「耳打ち」 Reia << おいしい（、、）

……なんて、ホントはゲームの中だから味なんてしない。

でも、オーリーと一緒に食べたクリスマスケーキはとても甘かった
|。

- E p i l o g u e -

――翌日、12月25日。

13時50分。

約束の時間よりまだ10分も前、原宿駅の表参道口の改札で

俺は“彼女”を待っていた。

昨夜の事を思い出しながら軽く息を吐き出すと、

すぐに白くなって消えていった。

13時55分。

“彼女”が乗っていると思われる路線の電車が到着した。

大勢の乗客が改札を通り過ぎてその中から“彼女”の姿を捜した。

背が低い彼女は見つけるのに少し苦労した。

人ごみに紛れて見えなかったから。

「沙耶」

改札を抜ける直前でようやく沙耶を見つけ出した。

俺が名前を呼ぶとすぐに視線を絡ませてきて、少し恥ずかしそうに笑いながら小さく手を振った。

「あ……雪」

駅を出ると雪が降っていた。

「ホワイトクリスマスだね」

俺は沙耶と手を繋いでコートのポケットに入れた。

「うん」

すると沙耶は軽く手を握り返してきた。

俺と沙耶は昨夜、お互いの気持ちを確かめ合った。

……ゲームの中でだけ。

でも、俺はちゃんと彼女に直接逢って言いたかった。

“沙耶の事が好きだ”と……

呼び方も今までは“成瀬さん”と“竹之内くん”だったけれど

“沙耶”と“慧くん”になった。

ゲームの中では相変わらず“オーリー”と呼び捨てに出来るのにリアルじゃ“慧”と呼び捨てに出来ないあたりが彼女らしい。

「沙耶、好きだよ」

耳元で囁くと彼女は少し驚いた顔で俺を見上げた。

そして嬉しそうに恥ずかしそうに、

「私も、慧くんの事、好き」

微笑みながら言った――。

・ E p i l o g u e ・ (後書き)

お陰様で完結致しました！

応援ありがとうございました！

続編は予定しておりますが、まだ執筆に入っておりません。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0749g/>

キューピッド・ゴブリン

2010年10月9日13時56分発行